龍は微睡む～蓬萊戯談(ホウライギダン)

香月遥乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍は微睡むホウライギタン
蓬萊戯談

【Nコード】

N0286X

【作者名】

香月遙乃

【あらすじ】

極東の国、蓬萊国ホウライ。清王朝が華王朝に変わってから、優に九十五年以上経ったその国では、科学文明が発達していた。しかし、「神仙の住まう国」とされた伝説は、人々に秘密にされながら、現在も生きていた。ひよんな事から、龍を育てる事になってしまった天下無双の女子高生・倉橋慧くらはしけいとその仲間たちの日常を描いた小説です。史実が関係する事はありませんが、100%ファンタジーです。悪しからず。他のサイトで投稿したものを、こちらでも載せさせていただきます。

ふたりの異邦人…？（前書き）

倉橋慧、龍の雛に会う。崇敬されるはずのその龍の仔どもは、しかし、大変な臆病者だった！全てが始まる、出会いの話。

ふたりの異邦人…？

『史記』秦始皇本紀

「齊人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬？・方丈・瀛洲。僊人居之。」

（齊の国の人、徐市が始皇帝に申し上げました。「海の真ん中に三つの神山があります。名前を蓬萊、方丈、瀛洲と言い、仙人がいる場所です」と）

袖富ゆふ高校に、季節外れの、そして、全く前例のない転校生が来たのは、秋も深まった十一月の事だった。

この時季は、そろそろ期末考査の影も忍び寄ってくるかと言っ頃だし、そんな時季に転校してきても、考査が終われば冬休みだ。

転校してくるには、不自然。

それに何より、この袖富高校は、転校生を受け入れていないのだ。しかし、そんな事には一人を除いて誰も気付いてはいないようだった。

「ちよつとねえ、慧！ 聞ってる？ 転校生男の子だって！！」

「ハイハイ、聞いてます。聞いてますっつてば。耳にタコが出来るくらい聞きました」

倉橋慧くらはしけいは、はあと息を吐いて友人の松永和世まつながかずよを呆れたように見遣った。

しかし、和世は慧の言う事など聞いちゃいなかった。ますます興

奮したように言い募る。

「転校生、男の子なのよ。男の子！ 絶対、格好良いに決まってる。どうやってお近付きになるうかしら！」

「絶対カッコ良い、って……。和ちゃんだって顔見た事ないんでしょ？ 何でそんな事断定出来るのよ？」

「何言ってるのよ、慧！ 転校生よ、転・校・生！ そんじよそこらの男子とは訳が違うんだから！！」

「一緒にゃん、と言う慧の心の中の呟きは、幸いな事に口をついて出る事はなかった。

和世の顔が、なぜか輝いて眩しい。

「転校するって事は、きつとお父さまの仕事の関係よね。あ、って事は、きつと貿易商か何かだね。その一人息子なんだから、これまでは家庭教師か何かが付いてたのよ。でも、彼は同じ年頃の友達が欲しかった……。だから、お父さまにお願いするの。」

『私は、高校に行きたいのです！』

『いやいかん、我が息子よ。我が息子であるからには、私の傍で勉強すべきだ。高校など行っても、墮落したヤツしかいない。私は、お前に跡を継いでほしいのだ』

『お父さま、そんな言い方はあんまりです！』

そう言って、彼は家を飛び出し、この袖富高校に

「ちよ、ストップ、ストップ！」

永遠のごとく続く和世の話を、慧はかろうじて止める事が出来た。

和世は、きよとんと首を傾げて見せた。

「なに？」

「『なに？』じゃない！ 和ちゃん、それ、ただの妄想でしょ。声色いろや身振り手振りまでして、演劇部の本領を見せてくれなくても良いから」

和世は、少しばかり残念そうな顔をする。

「えー。これからが良いところだったのにー」

「分かったから。いちいち妄想しなくても、転校生ならすぐ見れる

じゃない。来るの今日なんだから」

「ハイ」

間延びした返事をする和世に、慧はただ項垂れるしかなかった。和世は、見た目はどこにでもいるような普通の女子高生なのだが、中身ときたら、暴走族も脱帽するほど妄想が暴走するのが常だ。さしずめ、妄想族とでも言っておこうか。

妄想する本人は至って元氣いっぱいなのだが、付き合わされる慧の身としては、あまりに細部にまで妄想が及ぶので、一瞬真実かと思つて気が休まらない。

結局のところ、精気を吸い取られてしまつたのだつた。

予鈴が鳴つて、それと同時に、いつもは授業が始まるギリギリ前にしか現れない担任の社会科教師の堀内が入ってきた。生徒を一人連れて。

「皆、席に着けー」

教室は、すぐに静寂に包まれた。生徒全員が、転校生に注目している。

堀内は、コホン、と咳払いをした。

「今日から、新たに入る事になった岩井だ。…じゃ、簡単に自己紹介して」

はい、と転校生はうなずいた。

「初めまして。岩井文也いわいぶんやと言います。一応、京都から来ました。これから、よろしくお願ひします」

につこり。

文也は、背後に花が飛ぶかと言う勢いで微笑んだ。

健康的な白い肌、男の子にしては少し長い髪、そして、妙に深い瞳。可愛らしい顔をした文也は、見た目通りの笑顔をした。

女の子たちはうっとり見つめている。

しかし、慧だけは違った。

どこか、冷めた目で、これから級友になるその男の子を値踏みしていた。

文也が可愛らしいほどの童顔なのは、百歩譲って許せる。

だが、華奢な手足と言い、軟弱そうな雰囲気と言い、どうもいけ好かない。要するに、胡散臭いのだ。

「皆、慣れない事もあるだろうから、教えてやれよ。じゃ、席は」

堀内は、そう言葉を切って教室を見回した。女の子たちは、無言で熾烈な圧力をかけ合う。

誰もが、この可愛い転校生の隣になって、あわ良くば友達になりたいのだ。

慧だけが、もう興味を失ったかのようにそっぽを向いていた。

「 倉橋！」

「 え？ はい」

急に名を呼ばれて我に返ると、堀内は、爽やかに微笑んでいた。

「 お前の横、空いてるだろう。しばらく面倒見てやれ」

「 …分かりました」

女の子たちの痛い視線に辟易しながら、慧は、うなずいて文也が来るのを待った。

少し大きめの真新しい制服に身を包んだ転校生は、席に着くとにこりと笑った。

「 名前、何て言うの？」

「 倉橋慧」

無愛想に短く答えると、文也は「これからよろしくね」と更に笑みを深めた。

しかし、その笑みは、すぐに引っ込んだ。何かに気付いたかのよう
うに、じいっと慧の顔を見つめる。

「 な、なに？」

あまりにじっと見つめられるので戸惑って訊くと、文也は、妙に確信ありげに、真剣な顔付きで呟いた。

「 良い相だ」

「 は？」

「倉橋さん。今日、きつと良い事あるよ」

極上の笑みを頬に乘せて、文也は慧に言った。

何を言っているのか、意味がさっぱり掴めない慧は、文也に聞き質そうとした。

「ちよ、それって」

「授業始めるぞー」

堀内が、ちょうどタイミング良く口を開けた。

しんと静まり返る教室で会話をしては、目立つ。慧は、文也に訊きたいのをぐつと堪えて黙った。

本日の第一限は、中国史だ。蓬萊史ほうらいしと中国史は必須教科で、その内の中国史は、大抵高二で学習する。四千年以上もの膨大な歴史を、事細かに覚えなくてはならないので、結構大変だったりもする。

しかし、慧は、先程の文也の言葉が気になって、なかなか集中できなかつた。

「うっわー。すっげえ女子の山」

慧は、机に頬杖を付きながら投げやりに呟いた。

一限が終わった直後から、文也の周りには女の子が群がっていた。それは、放課後になってからも衰える気配はなく。

寧ろ、他学級からも集まって、收拾がつかない状態になりつつあった。

隣の席の慧は、目の敵にされ、完全に蚊帳の外だ。

もともと、加わる気は更々なかつた慧としてはありがたいのだが、正直、女の子たちが自分の席にまではみ出していて、女子の群れから出られない。

言葉遣いも雑になろうと言うものだ。

「なんだ。転校生って、お前のクラスだったんだ」

不意に耳元で囁かれて、慧は、息が止まるほど驚いて振り返った。

そこにいたのは、慧と同じ生徒だった。

胸の校章の色が違ふ事から、慧より一学年上の三年生である事がわかる。

「従兄だとわかると、慧は、目を据わらせた。」

「驚かさないでよね、タツキー」

「タツキーって言うな！ タツキーって!!」

タツキーこと、灌沢脩一は、唇を尖らせて文句を言った。

巷を騒がせているアイドルと、名前と容姿が似ている事から付けられた渾名を、彼は、倦厭していた。

と言つても、内心では得意になっているから、本気でその渾名を正そうとした事はない。

慧も、それを分かっているから、からかってそう呼び続けているのだ。

「仮にタツキーって呼ばないとして、じゃ、何て呼べば良いのよ？」

慧がそう訊くと、脩一は、ふんぞり返って言った。

「敬意を込めて『先輩』と呼べ」

「はいはい。灌沢センパイ」

慧は、馬鹿にしたように言つてやる。

脩一は、自分で言つておきながら、慧があつさり「先輩」と呼んだ事に、しかも、名前ではなく、名字の方で、予想外のシヨツクを受けていた。

ガアン、と言う効果音が聞こえてきそうだ。

肩を落として、脩一は呟いた。

「…やっぱ、いい」

「なにが？ セン・パ・イ？」

慧は、白々しく「先輩」と呼ぶ。勿論、嫌がらせ以外の何物でもない。

そんな従妹の性格を誰よりも把握している脩一は、遊ばれていると分かつて、拗ねたように言った。

「従妹のお前にまで先輩って呼ばれるのは、やっぱり不愉快だ。も

う、タツキーだろうが、脩一だろうが、好きに呼べよ」

慧は、あまりに可哀想だったので、くすくす笑って脩一をからかうのをやめた。

「で、脩一。何の用？」

「一緒に帰ろうと思って、迎えに来ちゃ悪いのかよ？」

「そんな事言っていないってば」

半ばいじけ気味な脩一の機嫌を取るように、慧は言って、やれやれと息を吐いた。

従兄とは言え、学年は一つ、年は二つしか離れていないのだ。

お互い、気安い間柄でもある。だから、脩一は、こんなに情けない姿を慧に見せているのだろう。

「……って言うのは、さて置き」

脩一が、不意に真面目な顔をして、改めて慧に向き直った。慧も、大人しく話を聞く姿勢になる。

「今日、父さんがウチに来いってさ」

「伯父さんが？」

うん、とうなずく脩一を見て、慧は、首をかしげた。

明日だったら、どうせ脩一の家に行く予定だったから、特に驚かなかったが、今日わざわざ呼ばれるのは解せない。

「やっぱアレかなー。ホラ、今日って、俺の誕生日だから！」

覚えてるか、覚えてるよな？

そう、迫ってくる脩一に「ハイハイ、おめでとう」と、全く心のこもっていない祝いの言葉を贈る。

明日なら、脩一の誕生日会をするから、呼ばれても納得できるのだが。

一体何の用だろう。

慧は、教科書を鞆に詰め始めた。

教科書類は律儀に全部持って帰っているから、結構重量はある。

しかし、それを物ともせず、慧はひょいっと肩に鞆を掛けると、生返事されて落ち込んでいる脩一に声をかけた。

「用意できたよ。帰る」

慧は、声をかけ、脩一を置いてさっさと出て行くつもりで、その後を、脩一が復活して追いかけていく。

「おい、待てよ。絶対そうだって！ やっぱ、俺の誕生日だからだつて！ なあ、慧。なあつてば」

「あーもうウザイ」

軽く耳を塞ぎながら、慧は、半ば本気で呟く。

何だかんだと言いながらも仲良く二人で教室を出て良く後ろ姿を、転校生がじつと見送っていた。

- - - - -

華王朝が清王朝に変わってからは、九十五年以上がゆうに過ぎている。

ここ蓬萊列島は、中国の東の端にある列島である。

中原の人々からは『東の蓬萊、西の崑崙』と並び称されている神獣と神仙の住まう国とされている。

しかし実際のところ、住んでいる人々の内でその神話を知っている者など、数えられるほどしかない。

科学が発達し、神獣と言った非現実的な生物の存在などは、オカルト雑誌やテレビのワイドショーくらいでしか持て囃されないのだが、しかし、慧は知っていた。

その神話が決してただのお伽話ではないという事を。

「…いつ見ても、大きい家ねえ」

脩一の家を見る度に、慧は、溜息を吐いてしまう。

瀧沢家は、知られてはいないが相当の名家だ。

それこそ、蓬萊国が出来る前 秦始皇の時代から、形ながらも

あつたと言つ。

そうして、内々に代々の天皇、ひいては、中国皇帝の保護を受けてきた。

なぜ、そのように保護を受けてきたのかといえは、それは、瀧沢家の司る裏の職種にあつた。

それは、古代から現代に至るまでの最大の秘事だ。国家機密でもある。

「まあ、坊ちやま。慧お嬢ちやまも。お帰りなさいませ」
出迎えたのは、家政婦の清美きよみだつた。

瀧沢家は、広いから、お手伝いがいないと管理できない。
勿論、彼女も、代々瀧沢家で家政婦をしているのだ。

そうした環境で成長した脩一は、にこやかに「ただいま、清美さん」と返したが、慧は、いつまで経つても慣れなかつた。

「こ、こんにちは。清美さん」
清美は、ペコリと頭を下げた慧に微笑んだ。

「まあまあ、丁寧にありがとうございます。慧お嬢ちやま」
「お嬢ちやまは止めて下さい」

いつも言ってますけど、と慧は眉を下げる。
はいはいと清美は生返事をするだけで、清美は聞かなかつた。こ

れも、いつもの遣り取りだ。
「旦那様。お帰りになりましたよ」

清美は、奥に声をかける。

ふたりの異邦人…？

出てきた伯父の総一は、一見すると、ただのしがなない国家公務員にしか見えなかった。

しかし、彼が、瀧沢家の現当主である。

総一は、二人を見ると、顔を綻ばせた。

「やあ、慧ちゃん。良く来たね。脩一もお帰り。さあ、上がって上がって」

総一に簡単に挨拶を済ませて、玄関から上がり込む。

廊下を渡り、座敷に行くと、人が沢山集まっていた。

「おや、慧。思っていたよりも早かったなあ。脩一君も、誕生日おめでとう」

真つ先に二人を見つけて寄ってきたのは、慧の父の綾次だった。

因みに、総一の弟である。

「ありがとうございます。叔父さん」

脩一は、神妙な顔でお辞儀をする。

慧は、あれ、と思った。

「何で父さんまでここに居るの？ タッキーの誕生日会なら、明日でしょ？」

「父さんだけじゃなくて、ハルちゃんも呼ばれてるんだよ。ホラ、あそこ」

「ハイ」

座敷の奥から、不惑の年に近付こうとしているのに、なお小娘のように華やいでいる母の深陽が手を振っている。

げんなりしながら、慧は、手を振り返した。

「どうして？ いくら、私たちが瀧沢家とは縁が深くて、今日は呼ばれないはずでしょ。父さんも、瀧沢の人間じゃなくなっちゃったし」

今日は、瀧沢本家の跡取り息子の十八の誕生日。

血が濃かろうが、薄かろうが、瀧沢の姓を掲げる者以外は、呼ばれる事はない。

それなのに。

疑問符で頭の中をいっぱいにさせていく慧の様子を見て、総一が何気なく答えた。

「実は、倉橋の人間を呼ぶように言ったのは、私じゃないんだ。龍^{りゅう}姫^{ひめ}なんだよ」

「龍姫が!?!」

瀧沢家は、太古の昔から、ある事を司っている。

それは、この国が神獣と神仙が住まう国と言うお伽話と、大いに関係が有る。

お伽話ではないのだ。

蓬莱国には、華王朝の皇帝を嘉^{よみ}する神獣が生活しており、その神獣を護り育てる神仙と呼ばれる人間がいるのだ。

そして、その姓からも分かる通り、瀧沢家は、『龍』に関わる神仙の一族なのだ。

龍姫というのは、その地上にいる龍を束ねる長老格の老婆だ。

龍姫自身、数千を生きた黄龍らしいが、本性を見た者はいないので定かではない。

龍姫と言う名自体が、名ではなく、通称なのだ。

慧に至っては、物心つく前に一度会ったらしいのだが、記憶にあるはずもなく、後は話に聞くだけだ。

父も、瀧沢の人間で総一の弟だったとは言え、倉橋家に婿入りした時点で瀧沢の人間ではなくなっている。

未だ神仙の地位を保持し、その上当主と誰よりも血が近いと言っても、このような一族が集まる場に呼ばれる事はなくなった。

おそらく、深陽と結婚してからは初めてなのではないだろうか。

そんな彼を　しかも、家族揃って　龍姫がじきじきに呼び出す

など、そうそうある事ではない。

しかも、今日は脩一が神仙となる日だ。

蓬萊の法律で言えば成人するのは二十歳なのだが、古くからの慣例では十八歳と言う事もあり、十八歳の誕生日に神仙として、昇仙しょうせんする事になるのだ。

そして、神仙となれば、おのずと龍の雛を育てるようにと一匹預けられる。

今日は、瀧沢家にとって、何よりも大事な日なのだ。

それなのに、そんな日に、瀧沢について知っているとは言え、部外者の慧たちが呼ばれている。

慧は、首を更に傾げた。

「私たち倉橋家の人間まで呼ばれるなんて、大ごとね。でも、神仙の父さんならともかく、私や母さんはいなくても良かったんじゃない」

「そちが居らぬと話にならんのだじゃ、慧」

静かな声が、背後から響き渡った。

座敷に入ってきた老婆を見て、皆は一斉に静まり返る。

真白の髪。皺だらけの黄ばんだ肌。曲がった腰。しかし、眼は炯々と光って、威厳があった。

老婆　龍姫は、意外にしっかりした足取りで上座に着いた。

口を、開く。

「今日、皆を呼び出したのは他でもない。神仙となる者たちを、皆に知らせるためじゃ」

慧は、自分の事でもないのに、固唾を呑んだ。

脩一が神仙となる、そんな大事な場面に自分がいるかと思うと、自然と背筋が伸びてくる。

同時に、自分が呼ばれた意味が更にわからなくなる。何か、これから龍姫が言う事と関係があるのはわかるのだが。

龍姫は、ぐるりと周囲に視線を送ると、一番末席にいた慧にピタリと視線を据えた。

慧は視線を合わせられて戸惑った。

「先頃、天帝より命が下った」

天帝からの命、と言う言葉に、ざわめきが起こる。

神仙は、天帝からの命を受けて拜命すると言う形を取ってはいるものの、実際はただの形式に過ぎず、十八になった者から順次拜命する事になっている。

大袈裟な儀式もない。長い歴史の間に、すっかり慣例化してしまったのだ。

しかし、それが、直接天帝からの命が下ったのだ。

その事を、一応は知っている慧にも、事の重大性が理解は出来たが、それと納得出来たかは別だ。

ざわついている人たちの感覚が掴めなかった。

龍姫は、スウと息を吸うと、衝撃の一言を放った。

「常ならば、脩一だけじゃ。しかし、此度は、そこに座する倉橋慧にも神仙の地位を与えよ、と」

「えっ？」

一瞬、辺りが静まり返った。

神仙となれるのは、血が濃かろうと、薄かろうと、『瀧沢』の名を持つ者だけ。

秘事を知る事は出来ても、関わる事は出来ないはずだった。

それなのに、今、瀧沢家の人間ではない慧にも神仙としての命が、それも、天帝自らの下知があったのだ。

呆然としてしまうのも道理だろう。

それこそ、前代未聞だ。

総一も脩一も、聞かされていなかったらしく、ポカンと口を開けて理解できないでいる。

龍姫は、慧を見つめて仄かに笑んだ。

「異例なのは、天帝御自身もご承知じゃ。なれど、命は命。逆らう事は出来ぬ。皆、心するように」

何故、自分がこの場に呼ばれたかは、これではつきりした。

しかし。

「龍姫！ どうしてなんですか？ どうして、私まで」

慧の声に、その場にいた全ての人間の視線が突き刺さる。妙な視線だった。

龍姫は、声を上げた慧に、チラと視線を向けた。

「納得がいかぬのは道理じゃろう。しかし、我も此度の雛は脩一だけでは心もとなかったところでのう。慧が拝命すれば、安心と言うものじゃ」

「でも」

「反論は許されぬ。すまぬな、慧」

皮肉げな笑みを片頬に刻むと、龍姫は、ピシヤリと言った。

「今日呼び出した件は以上じゃ。皆、ご苦労であった」

その一言で、皆はざわめきながらも立ち上がった。

今回は、異例続きだ。

ひとりの雛に二人の神仙がつくと言う事自体滅多にない事である上に、その二人の内の一人は『灌沢』の人間ではないのだ。

どうしてこのような事態になったのかは誰にも　おそらく、龍姫以外の誰も知らないだろうが、これまでの歴史の中でなかった事態である事は確かだ。

おそらく、一時間もしない内に、他の神獣や神仙の一族にまで知れ渡る事になるだろう。

慧は、ポツリと座って呆然としていた。両親が先に帰ると言ったのにも気付かないほどだ。

放心状態なのは、脩一も同じだ。

まさか、従兄妹で神獣の面倒を見るように言われるなんて。

脩一と、思わず顔を見合わせてしまう。

「さて。脩一、慧。…そう、固くならずとも良い。雛を育てると言うても、大した事ではない。特別な事はせずともよい。ただ、心の赴くままに導いてくれればよいのじゃ。我は、そちらに期待してるゆえ、な」

そう、龍姫は、意味深に微笑むと、すくっと立ち上がった。

「二人とも、ついて来なさい。雛に引き合わせよう」

ずりずりと足を擦るようにして、龍姫は歩き始めた。

龍姫は、この瀧沢家の中で生活している。それこそ、『神』だから、下にも置かないような待遇だ。

幼少期を天界で過ごす雛も、神仙がつくししばらく前から、龍姫の元で必要最低限の「人間として生きる知識」を教えられるために、この家にいる。

龍姫の住まいは、瀧沢の邸の奥にある小さな離れだった。しかし、小さくとも、神の住まい。清浄な空気に包まれ、きちんと掃除がなされて清潔だ。

「こんなトコ、初めて来た」

瀧沢家には幼い頃から出入りしてきたはずの慧の呟きを聞いて、総一が笑った。

「そうだろうね。ここは、瀧沢の人間と神仙しか入れない」

慧の父は、一応入れるらしい。

今は、倉橋の人間だから、龍を育てる事はなくなったが、たまに父に育てられたと言う龍が家に遊びに来たりする。

だから、龍を見た事が無い訳ではなかった。

しかし、今、慧の胸は期待に溢れていた。龍の雛って、どんな子なのだろう。

龍姫は、二人を見比べて、ニツと笑った。

「難儀な仔こでの。少々手はかかるやもしれぬが、根は良い仔じゃ。よろしく頼む」

慧と脩一は、顔を見合わせるとコクリ、と肯いた。

「これ、おいで。出ておいで」

龍姫は、離れの中へと呼びかけた。

ガタンツと一度、中で大きな音がしたが、後はシーンと静まり返っている。

息を凝らしているような気配がした。

はぁ、と龍姫は大きく溜息を吐くと、二人へと振り返った。

「人見知りかひどくてのう。…どれ、呼んでこようかの」

ガラリと戸を開け、龍姫は中に入っていく。

中に入ってしばらくして、どつたんばつたんと物凄い音がし始めた。何か、凶暴なものが暴れているような音だ。

慧と脩一は顔を見合わせた。なぜだか、嫌な予感がしてしまふ。

皆が、龍姫の身を心配し始めた時、龍姫が、肩で息をしながら誰かを伴って現れた。

「……さあ、皆に挨拶しや」

雛は、龍姫の小さな背に、隠れるように縮こまってくっ付いている。

龍姫が小さいので、隠れきれてはいなかったが。

「……………」

雛は、何も言わない。

見えるのは、真っ黒のポニーテール。同じく、黒い清服。

龍の雛、と聞いて、何か変わったところがあるのではないかと期待していた慧は、容貌は普通の子と変わらなさそうだったので拍子抜けした。

そして、首をかしげる。

龍姫と格闘していたらしいのは、本当にこの子供なのだろうか。

脩一が、気合の入っている顔で、慧に囁く。

「この雛に気に入ってもらえたら、この雛を引き取る。良いな？」

「……オツケー」

別にそんなのどうでも良いんだけど。

そもそもなりたくて神仙になった訳ではない慧は、そう思いながらも渋々うなづく。

面白そうだとは思うが、どうしてもやりたい訳ではないし、そもそも、自分の意志などどこにも無いのだ。

これで、この龍の雛が脩一を選んでくれれば、脩一に全て任せて無問題モトモンタイなのだが。

「……俺は、瀧沢脩一」

「私は、倉橋慧。あなたのお名前は？」

我ながら、小さい子に対するような甘ったるい喋り方になったと、内心苦くなる。

「……………」
雛は、やっぱり何も言わない。

しかし、興味が無い訳ではないのだろう。じっと見つめる視線を感じる。

無視はされていないのだろうが、案外、それよりも質が悪い。返事をしてくれる様子がないのに、慧の眉根が寄る。

「ホラホラ、声を聞かせてくれよ」

脩一は、芸能人も真つ蒼のスバラシイ笑顔を見せている。

ふと、雛が顔を上げた。

整った顔立ちの、見た目は一二、三歳ほどの少年だった。

脩一をチラと見ると、か細い声で龍姫に呟いた。

「……………わ…私は…、男は好かぬ。神仙がその者なら、嫌だ……………」

ピキッと、脩一の爽やかな笑顔が凍りついた。

慧は、その言葉を聞いて笑った。大いに笑った。泣くほど笑った。

おーおー、言うじゃないの、このヒナちゃんは。

龍姫も、若干顔を引き攣らせながらも、「では、慧じゃな」と呟いた。

慧は、にっこりと笑う。

「良かったわねえ、ヒナちゃん。本当は、タツキーもあなた付きの神仙だけど、男が嫌いだって言うなら、私が引き取ってあげるわ。

タツキーのこんな顔見れたし」

雛は、じつと慧を見つめた。

「……………け、慧も、神仙なのか…？」

「そうよ。…ところで。ヒナちゃん、って呼ぶのもナンだから、いい加減名前教えてくんないかな」

慧がそう言つと、雛は、ふいとそっぽを向き、ぼそりと言った。

「……………黎貴……………」

「ふうん。黎貴って言うんだ。カッコ良い名前じゃない」

「……………」
黎貴は、顔を隠した。チラリと見える耳が、真っ赤になっている。照れているらしい。

慧は、少なからず安心した。

喋れない訳じゃなさそうだし、反応も素直だし。

まあ、これなら、少し人見知りか激しいだけで手間はかかんないかな。

慧に懐いたと判断したのだろう。龍嫗は、黎貴を自分の背後から、前へと立たせようと押し出した。

「のう、黎貴。もう、この婆が居らなんでも大丈夫じゃろう？ 慧

の傍に行きや。慧がこれから面倒見てくれるのでう」

「え、ここから…、出て行かなくてはならないのか…………？」

黎貴は、へっぴり腰で龍嫗の背後から出て行く事を拒んでいる。

そんな仕草に、ピクツと、慧は眉を動かした。しかし、強いて笑顔を作る。

「出てきなさいよ。怖くなんかない。私がいるし。ウチの父さんも母さんも、優しいからさ」

「……………」

まただんまりかよ。

慧は、こめかみに血管が浮いてくる気がした。

ふたりの異邦人…？

そんな慧を、敏感に察知したのだろう。黎貴は、ますます身を縮こめた。

「……慧、怖い……」

ブチツと、慧の中の何か切れる音がした。

前言撤回。

こんだけ人見知りで、臆病で、女々しいヤツ、手間がかからない訳がない！

「誰が怒らせてると思ってんの！ 臆病で女々しい男なんか、大ッ嫌い！」

ビクツと黎貴は、怯えて体を竦めた。その黎貴の様子に、慧は、更にイライラが募る。

不意に、チラツと途轍もなく落ち込んでいる脩一を横目で見た黎貴に、慧はピンと来て、目を据わらせた。

「…今、やっぱり脩一が良かったなって思ったでしょ…？」

黎貴は、ぎくりと背を波立たせた。

凶星だったらしい。

不穏な慧と黎貴に、総一と龍嬸はハラハラして見守っている。

「自分で断つといて、今更『やっぱり良かった』なんて、脩一に失礼だと思わないの！？ 私は、強制しなかったでしょ。自分で選んだんだから、後で変えないの！」

「……………」

その言葉を聞いて、黎貴は、非が有ると悟ったのだろう。しよんぼりと頂垂れた。

そんな遣り取りを見ていた総一と龍嬸は、顔を見合わせた。

この様子なら、大丈夫だろう。

慧は、黎貴がしょぼくれているのに気付いて、ふう、と息を吐いた。

「私だって、怒りたくて怒ってんじゃないわよ。あんたの事を思
って怒ってるのよ」

「……私のため…？」

黎貴は、恐る恐る訊く。慧は大きくうなずく。

この小さくて人見知りで、手かかかであるう雛にはこれから苦
労しそのだが、黎貴が自分を選び、自分もそれを受け入れたのだか
ら、彼のために頑張ろうと思う。

慧は、そう覚悟を決めたのだ。

「勿論。私は、あんたの神仙なんだもん。どんな場所でも、胸張っ
て生きて欲しいの。臆病者にも、卑怯者にもしたくない。私は、い
つだって、あんたの事を思ってるんだからね」

「……そう、か……」

黎貴は、龍姫の背でなぜか小さく笑ったようだった。

慧は、少し疲れたように再度言った。

「さ、黎貴。いい加減龍姫から離れて。いつまでもしがみ付いてち
や、龍姫が迷惑よ」

「……………」

黎貴は、少しためらう素振りを見せたが、おずおずと龍姫の背か
ら手を離し、慧の前へと出てきた。

龍姫は、眼を見開く。

まさか、こんなに素直になるとは予想していなかった慧も、瞬間、
目を見開いたが、すぐに微笑んだ。

「良く出来ました」

まずは、この臆病な雛の第一歩だ。

自分で、自分の力で、前に出てくる事。

慧は、サツと黎貴の手を掴んだ。驚いて反射的に引っ込めようと
する黎貴の手を、ますます強く握り締める。

「さあて、家に帰りましょ。今日は、母さんがご馳走たくさんで待
つててくれるハズよ。じゃ、龍姫、伯父さんお邪魔しました。タ
ッキー、また明日」

踵を返すと、途端に自分が空腹な事に気付いた。慧は、黎貴にこりと笑いかける。

「これから、よろしくね」

黎貴は、まだまだ固い表情で、コクリと肯いた。

灌沢家を後にする。慧の家は、灌沢家からさほど離れている訳ではなかった。歩いて十分もあれば余裕で着いてしまう。

しかし、どこに連れて行かれるのかいまいち把握していない黎貴は、不安で落ち着かなく周囲をきよきよと見回していた。

初めて見る外の景色と言うのもあるからかも知れない。

意を決して、ボソツと訊こうとする。

「……あの…、どこ、に…？」

慧は、ギロリと一瞥をくれる。

早速、教育的指導をする事となりそうだ。

「何か言いたい事がある時は、ハキハキ喋ること！ 聞きにくいでしょう」

「………」

コクリ、と黎貴はうなずくが、慧は厳しかった。

「返事は！？」

「……はい……」

慧の今の言葉の効果からか、黎貴は少しだけ大きな声で返事をした。それでも、まだまだ小さな声ではあったが。

しかし、素直に言う事を聞いてくれると言う事は、それだけ自分を信用してくれているのだ。

そう思うと、慧は少しだけ嬉しくなる。

ふと、気付いた。

黎貴の手が、緊張と不安のあまりに震えている。それが、繋いだ手から伝わってきて、慧は表情を和らげた。

流石に、不安になるのも無理はなかったか。

「これから、私のウチに帰るのよ」

「…慧の、家……？」

「そう。あんたの家にもなるんだからね」

「…私の、家に……」

分かつているだろうに、不思議そうに言う黎貴が可笑しくて、慧は笑った。笑うと、愛敬がこぼれて可愛らしい。

「もう。一緒に暮らすつてのはそう言う事でしようが。先に父さんが帰つてはるはずだから、あんたの部屋も用意してくれてるんじゃないかな」

気兼ねせずに暮らしてよね。

慧はそう言つて、ピタリと足を止めた。

閑静な住宅街の中にある小さな家。大きな邸宅が並んでいるその中での大きさは不釣り合いだったが、普通の住宅と呼ぶには良い家だ。綾次が外務省に勤める高級官僚だからだろう。

「ここが私ん家よ」

慧は、笑つて玄関の戸を開ける。

そして、中に入るなり慧の顔が甘く蕩けた。

「やだ、ムーン！ ただいま。出迎えに来てくれたのぉ」

慧の変貌に黎貴が驚いていると、慧は「ムーン」を抱き上げた。

白い体に頬をすり寄せて、慧は黎貴に向き直った。

「黎貴、早速家族を紹介するわね。ムーンよ。お月さまみたいに綺麗でしょ」

それは、白い雄猫だった。

ごろごろと喉を鳴らして慧に甘えているが、慧が紹介してくれたのに気付いたのか、一瞬だけチラリと黎貴を振り返った。

ふん。

ムーンが鼻で嗤つたような気がして、黎貴は少しだけムツとしたいや、気のせいではないだろう。

黎貴は、曲りなりにも神「獣」なので、動物の声くらいは聞き取れる。しかし、今は聞き取りたくなかった。

黎貴の事は、恐らくムーンも神獣であるとわかつてはいるだろう。そして、同時に黎貴がヘタレである事も、慧に完璧に懐いてしま

っていると言っ事まで。

動物は聡い。一目で黎貴が敬うに足る者ではないと看破してしまつたのだ。

じとつとムーンを睨みつける黎貴に、何を勘違いしたのか、慧はムーンの胸を持って黎貴へと差し出した。

「猫が珍しい？ 抱いても良いわよ」

「えっ……」

そんなつもりで見ていた訳では毛頭ないのに、なぜか反論出来ずに、黎貴はもごもごと何か口の中で呟くと、そろそろと手を差し伸べた。

ムーンに触れようとした、その時。

バリッ。

「ッ！」

突然、ムーンが威嚇したかと思うと、黎貴に爪を立てた。

「ムーン！」

慧が驚愕して叫ぶ。

ムーンは、身を擦って床にフワリと着地すると、黎貴を一瞥して部屋を出て行った。

俺様に触るな。

チラリと見た時に、ムーンがそう言ったような気がして、黎貴は啞然とするしかなかった。

これまで、ここまで神獣を敬わなかった動物がいただろうか。

一方、慧は慌てて黎貴の手を取る。

「ちよつと、大丈夫！？ やだ！ 血が出てるじゃない！」

「血……！？」

そう言われて、ギョツと指を見つめると、人差し指に斜めに蚯蚓みみず腫れはが走っている。

それに、薄っすらと紅いものが滲んでいるのが見えて、驚愕のあまりそれまで全く感じていなかった痛みが襲ってきた。

傷の痛みを実感すると、怖くて痛くて泣きたくなる。

「…痛い……！」

「もう、こんなの大した傷じゃないわ。泣かないの。…手当てしてあげるから、居間に行きましょう」

そう言つて、玄関で靴を脱ぎ始める慧に、声がかげられる。

「やあ、慧。お帰り。…そつちは雛だね？ ようこそ、倉橋家へ」

玄関での騒ぎを聞きつけて、綾次が出迎えに来た。

初めて見る人間に、黎貴は人見知りをして慧の後ろに隠れてしまふ。慧の背から、綾次をチラリと窺う。

綾次は、黎貴のそんな行動に少し面食らつたようだった。

神獣にも色々な性格の者がいるのは勿論わかつてる。しかし、

「神」獣なのだから、大抵は怖いものなどないと言う顔をして地上に降りてくる。

人間を恐れなどしないから、人懐っこい神獣も多い。

まさか、人見知りをすると云う事は起きないのが常なのだ。

「…えつと…？」

戸惑つた綾次を見て、慧はまたピクリと眉を吊り上げる。しかし、まずは黎貴の傷の手当の方が先だ。

黎貴に靴を脱いで上がるように言い、綾次に向き直る。

「ただいま、父さん。紹介は後で母さんと一緒にさせるわ。…黎貴がムーンに引つ掻かれちゃつて…。救急箱つてどこにあつたっけ？」

「えっ！？ 怪我をしてるのかい！？ そりゃあ大変だ」

綾次は、慌てて奥へと引つ込んだ。救急箱を取りに行つてくれるのだらう。

その間に、慧は黎貴を玄関から真つ直ぐに伸びている廊下の突き当たりにある居間へと連れて行く。

居間のソファには、我が物顔で寝そべっているムーンがいた。体勢がふてぶてしい。

今度ばかりは、慧も叱らざるを得なかった。

「ムーン。そこをどきなさい。もう、黎貴になんて事するのよ」
残念ながら、随分と甘い説教になつてはいるが。

ムーンは、心外だとも言いたげな顔をして、渋々ソファから降り、自身の第二の定位置、テレビの上へとひらりと身軽に飛び乗る。「ホラ、黎貴。座って傷見せて」

ソファに座った黎貴は、恐る恐る慧に傷を見せる。蚯蚓腫れは痛々しいが、それほどひどいものではないし、血はもう止まってかさぶたも出来始めている。

これなら、手当ての必要もないかもしれない。

「…痛い…」

「めめめそしないの。男でしょ」

「慧。救急箱だよ。…傷は大した事はないのかい？」

救急箱を取りに行った綾次が、箱を持って入ってくる。

黎貴は、逃げたそうに腰を浮かせたが、慧に手を掴まれている上に、じいつと見つめられていて動けずに、綾次の接近を許すしかなかった。

「うん。消毒して絆創膏貼れば大丈夫」

慧は、救急箱を受け取ると、テキパキと消毒液を出して、液を浸した綿を黎貴の傷へと押し当てた。

消毒液が傷に染みるのはどんな生き物でも等しく同じなので、黎貴も当然ビクツと手を引つ込めて泣きそうになった。

「…痛い…！」

「あつ、いやつ、慧！ もう少し優しく手当てしてやりなさいっ」
見ている綾次がおろおろと言うのに、慧はきっぱりと返す。

「これくらい、大した事ないわ。…父さんも、あんまり甘やかさないで」

「…慧。初日からそんなに厳しい事を言わなくても…」
意外に教育熱心な愛娘に、感心を通り越していつそ呆れてしまう父である。

神仙の「先輩」としては頼もしい限りだが。

ぺたりと絆創膏を貼ってやり、慧は初めてにっこりと笑った。

「はい、これでよし。しばらくは剥がしちゃダメよ」

「…分かった…」

黎貴は、絆創膏を物珍しそうに見つめてから、コクリと素直にうなずく。

そんな様子を見て、綾次は目を見開いた後に苦笑する。

我が子ながら、飴と答の使い方が巧うますぎる。

「さて、じゃあ夕食にしよう。ハルちゃんが、張り切って用意してくれているよ」

綾次は、先頭に立って台所へと向かう。後に続くのは慧、黎貴。最後尾はムーンだ。

食卓の上には、溢れんばかりの料理が乗っていた。

いそいそと料理の皿を置いているのは、ピンクのフリフリエプロン姿の深陽だ。

不惑の年になろうと言うのに、なぜか似合ってしまうそのエプロンが憎い。

三人に気付いて、深陽はにこにこしながら近寄ってくる。

「お夕飯の用意、出来てるわよ。あら！ まあまあまあ」

ふと、黎貴に気付いた深陽が妙な声を上げて顔を近付いてきた。

黎貴は、突然の事にびっくりして、慌てて体を引く。

「慧！ この子が龍の雛ちゃんね！？ ようこそ、倉橋家へ！」

「……………」

黎貴は、やはりと言うか、予想通りに無言だった。

ピクリとこめかみをヒクつかせた慧は、何も言わずに黎貴を肘で小突く。

黎貴は、強くはなかったものの肘鉄にビクツとして、慌てて、しかしおずおずと口を開けた。

「……は、初め、まして……。れい、黎貴、だ……」

どもりながらの小さな声での挨拶だったが、それでもしてくれた事に満足して、慧はうなずく。

綾次と深陽は、顔を見合わせるとにっこりと微笑んだ。

「初めまして。私は慧の父の綾次」

「私は慧のお母さんの深陽よ。ハルちゃんって呼んでね」

「……わ、かった……」

黎貴は、目を白黒させながら深陽の迫力に圧されて返事をする。

慧は、母にうんざりして大きな息を吐く。この母は、もう良い年なのに、いつまでも小娘のようだ。

挨拶を交わした事で、少しだけ黎貴の中の緊張と人見知りは薄れたようだった。

まだまだ自分から近付くには至らないが、少なくとも、慧に背を押されなくても向き合える覚悟はついたらしい。

「……慧……」

黎貴が、不意にポツリと呟く。

なに、と倉橋家の人間が全員黎貴の口元に注目した。黎貴は、その事に少し怯えながらも言う。

「……甘い、匂いが……」

「甘い匂い？」

慧が、聞き返す。くんくんと空気を嗅いでみると、確かにバニラの甘い匂いがする。

その瞬間、深陽がオープンへと走った。

「いけない！ スポンジケーキ焼いてたんだっわ！」

お菓子作りが趣味の深陽は、黎貴の歓迎のために、料理もさる事ながらケーキも一緒に焼いていたらしい。

「……ケーキ……」

不思議そうに呟く黎貴に、慧はあれと聞き返した。

「黎貴、ケーキ食べた事ないの？」

コクリと黎貴はうなずく。横から、訳知り顔の綾次が説明する。

「雛が地上に降りるまで暮らす天界は、古代中国神話の世界だからねえ。知識にはあっても見た事もないものなんてたくさんあるんだよ」

「へえ〜」

慧は納得する。

ケーキは西洋から入ってきた食文化だ。見た事も食べた事もなくて当然だ。

瀧沢家の龍姫はケーキなんて食べなさそうだし。

「ケーキはすごーく美味しいわよ。あの甘い生クリームが堪らないったら…」

慧の言葉に、黎貴が生唾を呑みこんだのが分かった。慧は、綾次と顔を見合わせて笑う。

「まあ、とりあえずケーキは夕食が終わってからだよ。…ハルちゃん、大丈夫かい？」

「ええ、後はデコレーションするだけ」

深陽が、焼き上げたスポンジケーキをオーブンから出して、台所へと再び入ってくる。

慧と黎貴が席に着くと、綾次がグラスにオレンジジュースを注いで回る。

全員が席に着き、綾次はグラスを掲げる。

「では…。倉橋家の新しい家族、黎貴君に乾杯！」

「乾杯！」

黎貴は、その言葉に小さく目を見開いたものの、微かに笑って同じくグラスを掲げたのだった。

龍との関係（前書き）

龍と仲良くなる方法。なんて言っても、そんなの人間の場合と大して変わりません。それでは、瀧沢脩一の場合はどうなのか？

龍との関係

次の日の放課後。

慧の周り　　と言うか、転校生文也の周りには今日も多くの女子が群がっていた。

「ねえ、岩井君の家ってどこら辺なの？」

「兄弟っているの？」

それこそ、質問は根掘り葉掘りだ。

頬杖を付きながら隣の席から眺めている慧も、流石に呆れて、よく続くものだと思っていた。

それだけ、文也の事が知りたくて堪らないのは分かるが。

「僕は、皆の事が知りたいな。教えてよ」

文也は、そう群がっている女子に質問し返し、おまけにその可愛らしい笑顔で質問を煙に捲こうとする。その事に、傍で聞いている慧には分かった。

周りの他愛無い女の子たちは騙せても、自分は騙されない。

話したくはないのだろうか。それとも、何か秘密でもあるのだろうか。

昨日の不可思議な発言が未だに頭に引っかかっている慧は、何だか面白くない。

どうも、この文也と言う転校生の全貌がはつきりしないのだ。

「よっ、慧。待たせたな」

ぼんやりと隣を眺めていると声が掛けられた。

一緒に帰るのがいつもの事となっている脩一が、教室まで迎えに来たのだ。

「じゃあ、帰ろっか」

慧は席から立ち上がり、脩一と共に学校を出る。

今日は、脩一は倉橋家に寄っていく予定なのだ。

黎貴の神仙となったのだから、一日でも長く黎貴と一緒に居たい

のは当然の事だ。

ましてや、人見知りをされているのだとしたら尚更だ。

一刻も早く馴れてくれなくては、神仙として傍にはいられない。

「今日は、黎貴どうだった？」

「どうって？」

急にそんな事を訊かれて、慧は質問の意図が分からずに問い返す。

脩一は、そんな慧がじれったそうに口を開けた。

「寝起きは良い方なのか？ 朝ご飯はしっかり食べてたか？ 好き

な食べ物？ 嫌いな食べ物？」

「はいはい、ストロップ！」

「人間の生活には馴染んでいそうか？ それから、それから」

慧は、脱力して待ったをかける。

脩一は、慧の制止にも気付かないように、まだ怒涛のように質問をする。

自分の話を聞いていないのを知って、慧はドスツと脇腹に拳を叩き込んだ。

「俺の事はなんて ガハツ！」

脩一は、慧の拳の前に、呆気なく膝を付いた。慧は、にっこりと笑いかける。

「そーゆー事は、黎貴に直接訊いてくれる？」

かなりイライラさせてしまっていたらしい。

その事にようやく気付いた脩一は、腹を押さえたまま大人しく呟いた。

「……………分かりました」

「よろしい」

慧は、大きく肯く。

「…でも、黎貴、俺に懐いてくれるかな…」

余程、昨日黎貴に「嫌だ」と言われたのが堪えたのだろう。ふと、

脩一は、いつもの脩一らしくない弱音を吐いた。

だから、慧はその弱音を笑い飛ばしてみせる。

「何言ってるの。あんたらしくもない。：脩一、あんたはウザイけど、あんたを嫌う人間なんてそうはいないわよ」

「慧…」

従妹として生まれた時から付き合ってきた慧だからこそ言える言葉だった。

脩一は、思わず感動してしまった。

口は悪くて、すぐに手が出る慧だが、本当は誰よりも優しいのだ。もう、ちよっと！ 離れなさいよね！」

歓喜のあまり抱きついてくる脩一にもう一発拳を叩き込んでから、慧は玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「……おかえ」

律儀にも出迎えてくれた黎貴は、玄関に脩一がいるのを見て固まった。

「よ、黎貴……」

脩一は、慧に殴られた一発が効いているのか、玄関に蹲りながら片手を挙げて引き攣った笑顔を見せる。

慧はにっこりと微笑んだ。慧の微笑みには、黎貴は何か良いことがあると刷り込まれているようで、ふうっと表情を和らげる。

「今日は脩一も連れてきたわ」

「…え」

黎貴は、小さく声を上げる。また固まった。しばらく固まった後に、そろりそろりと後退りし始める。

それを見た慧は、黎貴の腕をサツと引っ掴んだ。

「どうして逃げるの？ 脩一は、あんたの神仙よ？ 味方なのに、何を怖がってるのよ？」

慧にはもうかなり懐いている黎貴は、慧の言葉に足を止めてふうと脩一を見つめた。

「……脩一、は…味方……？」

脩一は、ここぞとばかりに身を乗り出す。

「そうそう。俺は、お前の味方だよ。…慧よりは怖くないから、もう少し仲良くしてくれると嬉しいんだけどな」

「何か言ったかなあ？」

脩一の言葉を聞きとがめて、慧は低い声で呟く。脩一は、ギクリと背を波立たせた。

「あ、け…慧ちゃん…」

「だあれが怖いですって？ 一体、だ・れ・が？」

「い、いや、それは…。ちょ、ふいた…！ ほふいるから！」

頬をびろーんと左右に引っ張られて、脩一は涙目で「痛い、伸びる」と繰り返す。

慧は、えいえいと更に引っ張ってから、ようやく解放してやった。

脩一は、頬をさする。すっかり赤くなってしまうていた。

「痛…。ホント、手加減なしだよなあ」

「何を今更。あんた相手に手加減したって意味ないでしょ」

慧は、ふん、と鼻を鳴らす。

まだ痛い頬をさすっていた脩一に、黎貴が可哀想に思ったのか、おずおずと近寄ってきた。

「…だ、大丈夫か…？」

「や。大丈夫大丈夫。いつもの事だし」

近寄って、自分から声を掛けてきてくれた黎貴に一瞬目を見開いたものの、脩一はすぐに何でもないかのように笑って答える。

「俺はちゃんと分かっているから。これも一種の『愛』だって」

「ちよつと、気持ち悪い事言わないでくれる？ マゾ？」

「ちっがーう！」

キラキラとした瞳でいった脩一に、慧は本気で鳥肌が立ったように半眼で睨む。

脩一も気付いたのだ。これまでの遣り取りが慧の半ば仕組んだ事だったと言う事に。

同情であれ、何であれ、まずは話しかけても安心な相手だと思わせる事が肝心。

そのために、慧は自ら憎まれ役を買って出たのだ。

案の定、黎貴は二人のやりとりから脩一に少しだけ親しみを持ってくれたようだった。

そうすれば、もうこっちのものだ。

結局黎貴を質問責めにして引かせてしまったが、脩一は何とか黎貴の心を掴む事に成功したようだった。

聖夜の怪……？（前書き）

黎貴れいきが下界に降りてから迎える、初めての大きなイベント。果たして、楽しめるのか！？

聖夜の怪…？

「…け、慧^{けい}。くりすますとというのは一体何なのだ？」

クリスマスツリーの飾り付けをウキウキしながらしていた慧に、黎貴^{れいき}は必死に訊いた。

先ほどからはしゃいでいる慧のテンションに、黎貴はついていけないのだ。

どうやら、楽しい事であるらしいというのはわかったものの、何がどう楽しいのわからなくては、一緒に喜べない。だから、黎貴は必死だった。

慧は、手を止めて何と説明しようか悩んだ後、ちよいちよいと手招いた。黎貴は、そろそろと近付いて慧の傍に座る。

「黎貴は、基督^{キリスト}教^{つて}知^つてる？」

コクリ、と小さな龍はうなずいた。

「西には、西の神がいるのだと聞いた…。キリストというのは…、その神の子だと龍^{りゅう}が言^いっていた…」

「まあ、間違^{まちが}っちゃいないわね。クリスマス^{つて}というのはね、そのイエス・キリスト^が生^まれた日^の事^よ。皆^{みな}でお祝^いするの」

黎貴は軽く首を傾げた。

「…誕生日会^のような…？」

「そんなとこね」

慧は明るく笑う。黎貴は、更に首を傾げた。

「なに？」

「…いや…。たかが神の子でしかない者の誕生日など、なぜ祝^うのだ…？ 信^{しん}じていないに…」

その鋭い言葉に、慧はうっと唸^うった。

いつもは臆病^{おくびょう}さに隠^{かく}れて気づけないでいるが、黎貴は聡明^{そうめい}だ。それが、こんなふとした会話^{から}気づかされる。

一方、黎貴は慧が無言^{むげん}になっ^ている事^に内心^{うちしん}怯^{おそ}えていた。

普段は陽気で明るい慧だが、不機嫌になったり起こったりすると半端なく怖い。それこそ、黎貴は内心鬼だと思っている。

「そうね。確かにそうだね。なんでだろう?」

慧は、ただ純粹に考え込んでいただけだった。

黎貴は恐る恐る問いかける。

「…け、慧。怒ってはいないのか?」

「何を怒る必要があるのよ? それとも、なに? 私が怒るような事したの?」

「し、してないっ」

だんだん不穏になっていく慧に慌てて否定して、黎貴はホツと息を吐く。

慧は、まだ疑り深そうに黎貴を見つめていたが、諦めて笑いかけた。

「ま、誰の誕生日だろうが、信じてなかるうが、蓬萊人ほうらいじんつてのはイベントが大好きな民族なのよ。しょーがないわ。黎貴も、余計な事は考えずに楽しもうっ」

「ああ」

うなずいて、黎貴は、そのくりすますつりーなるものを見つめた。キラキラしたオーナメント、色とりどりの電飾。

天界で育った黎貴にとっては初めて見るものばかりだ。しかし、それはなぜか心を浮き立たせる。

黎貴はだんだん楽しくなってきた。

「…慧、その星はどうするのだ?」

黎貴が慧の手にある大きな金の星を見つめる。慧は笑って差し出した。

「天辺に飾るのよ。やってみる?」

「良いのか?」

黎貴は瞳をきらめかせた。

倉橋家のクリスマスツリーは母の深陽みはるの趣味で異常にでかい。本物のもみの木を使っているのだ。なので、当然の事ながら誰も天辺

に手が届かないのだ。

慧は、黎貴に声をかけた。

「脚立を持ってくるわ。少し待ってて」

そう言って、慧は居間から出ていく。残された黎貴はぼんやりとツリーを見つめた。

ふと、そこに。

とことこと白猫のムーンが現れた。つい、と黎貴を見やる。

「ムーン…？」

ムーンがニヤリと笑ったような気がした。

瞬間。

しなやかな体をバネのように折り曲げて、ムーンはツリーに飛びついた。ツリーは、もの見事に黎貴の方へと倒れてきた。

「わ、ああああっ！」

黎貴は、頭を抱えてうずくまった。その横を、大きなツリーが振動と共に倒れた。土台が不安定だったようだ。

どうやら、間一髪。黎貴がドキドキする胸をなだめていると、慧が慌てて駆けつけた。

「どうしたのっ！？　すごい音が　、怪我は！？」

ツリーの横にうずくまっっている黎貴に、慧は持っていた身長よりも高い脚立を壁に立てかけて傍による。

「…だ、大丈夫だ…」

黎貴は、心底安心したように答える。

それにひとまずはホツとして、慧は「あーあ」という顔をした。

「せっかく飾りつけしたのに、こんなにして…」

「…わ、私ではない…！」

黎貴が珍しく顔を上げて答えたので、慧はびっくりした。

「あんたじゃなきゃ誰がやったのよ？」

「あ…いや…ムーンが…」

「ムーンがそんな事するわけないでしょ」

慧がきっぱり言い放った。黎貴は、ちよっとの間呆然とした。

「あんなちっちゃくて可愛いムーンがこんなおっきなツリーを倒せるはずがないじゃない」

慧は、頭から信じてしまっていた。まあ、その気持ちも無理からぬ事ではあるが。

黎貴は、大好きな慧に濡れ衣を着せられて慌てた。

「ち、違…！」

「あー、はいはい。もう良いわ。さっさと直しちゃいませよ」

慧は気にせずに適当に言って大きなツリーを元に戻した。このツリーがグラグラする事をもたらから知っていた慧は、これくらいでは怒らなかつた。ただ呆れただけだ。

しかし、異変に気付く。

ふっと黎貴を振り返ると、彼は唇を引き結んで俯いていた。ぐすり、と鼻を嚙る。

慧はうんざりした。黎貴には随分慣れたが、どうしてもここだけは気に入らない。

「…私では、ない…っ！」

黎貴は、叫んで唇を引き結んだ。慧は、ツリーを立たせようとして、ハツとした。

いつものような細い声だが、こんな強い口調の黎貴など初めてだ。どうやら、本当に濡れ衣を着せてしまったらしい。

ソファで寛いでいるムーンを見れば、今の黎貴の言葉にぎっくりしているようなので、やはりムーンが犯人と見て間違いないだろう。慧は反省した。早とちりが過ぎたようだ。黎貴の目を真っ直ぐに見つめて謝る。

「ごめん、黎貴。あんたは本当に何もしていないのね。謝るわ。疑って悪かったわね」

「……」

黎貴は、慧の殊勝な様子に一瞬信じられないというようにポカンと見ていたが、我に返ると大きく首を振った。それから、少し頬を染めた。言わないが、誤解が解けて嬉しいのだろう。

黎貴は、口下手で言葉がすぐに出てくる方ではない。それに気付くまで、人見知りのせいかと思っただけでかなりイライラしたが、今も、イライラしないわけではないが、今では結構慣れてしまった。慣れれば、どうという事はない。

「さ、今日中にやっちゃわないと。…黎貴。脚立立ててあげるから、あなたは上から飾りつけ直してくれる？」

「上から…」

黎貴は、慧をじっと見つめる。慧は、「ん？」と首を傾げた。

「なに…？ あ、もしかして、高所恐怖症？」

本性が空を悠然と飛ぶ龍なので、それはないだろうとも考え付かず、なにも考えずに慧が訊くと、ふるふると黎貴は首を振った。

「違う…。慧は？」

「私？」

きよとんと慧は自分を指したが、すぐに黎貴の言いたい事がわかったので、につこり言う。

「私は下から飾りつけを直していくわ。二人で直したらずっと早く終わるわ。終わったら、何かおやつでも買いに行きましょう。」

是と黎貴はうなずいて、二人は黙々と飾り付けを直し始めた。

天辺には金の星、さまざまな色のモール、電飾。倒れて外れてしまったとは言っても元はきちんと飾りつけされていたものだ。元通りにするのにさほど時間はかからなかった。

クリスマスまで残り少しだ。町の中も、並木などにカラフルな電飾が絡められて華やかだ。夕方近くから深夜まで点けられているので、チカチカしている。

黎貴は、こんなに明るい町も、華やかな飾りもこれまで見た事がなかった。こわごわと周囲を見回しながらも、目が輝くのを押さえられないでいる。

「あれ？ 慧と黎貴じゃん」

前から歩いてくる人物に妙に見覚えがあると思ったら、じゅんじゅん 脩一だった。

寒がりなので、白いロングコートをはがっちり着込んだ上にチエックのマフラー、手袋までしている。気障な格好だが、それが似合うから趣味が悪い。

「どうしたんだ？ 買い物？」

脩一は、爽やかに笑って慧の手にあったスーパーの袋に目をやった。慧と黎貴はうなずく。

「そう。母さんがシチューにするって言ったのに、肝心のジャガイモないの忘れてんだもん。まったくもう。ついでに、おやつも買ってきたの。タッキーは？ …あ、もしかして、デート？」

「そんなんじゃないっ！」

ニヤリと笑って訊く慧に、脩一は頬を紅くして反論した。

「そりゃあ、お邪魔でしたねえ。彼女さんはあ？ ごめんなさい。すぐに私たち帰りまーす」

慧は、勿論、当然のように脩一の反論など無視だ。

「違っつてば」

「あ、紅くなってる。照れてる？」

「だから、違ーう！」

慧は、ひとしきり脩一をからかって満足した。毎日のように会うとは言え、冬休みが始まってからは会う回数は減ってしまった。良い玩具おもちゃがなくなってしまった慧としては、傍にいる黎貴では物足りない。

「で、何なの？ 手ぶらだし」

「財布と携帯くらいは持ってるよ」

脩一は言い返してから、自分を見つめている黎貴に笑いかける。

黎貴は、脩一と目が合っても平然としている。流石に慣れてくれたか、と脩一は嬉しくなる。

最初の頃は、目も合わせてくれなかったのが、今では一緒にいる

事を当然として考えてくれているのだ。嬉しくもなる。

脩一は、微笑んだ。

「クリスマスケーキの予約がたら、ツリーでも見に行こうと思ってさ」

「クリスマスケーキ……」

黎貴は、ポツリと呟いた。すでに何百と生きている龍だが、ケーキと聞いて目を輝かせるところなどは、見かけの年相応だ。

聖夜の怪…？

初めて慧の家に来た時の歓迎会でケーキを食べて以来、黎貴は洋菓子の虜になっている。あんこなどの和菓子も好きだが、何と云ってもあのバニラビーンズとほのかに甘いスポンジケーキが堪らない。そのせいで、お菓子作りが趣味の深陽には懐きまくりだ。

脩一へと身を乗り出さんばかりに目を輝かせている黎貴に、慧は笑った。

「ウチも、もう予約してるわよ。前日は母さんイサも焼く予定だし」

「本当かつ…！？」

「ホントホント。すごく張り切ってたもん。あんたのために」

慧はにっこり笑う。黎貴は、その言葉を聞いて珍しくにっこりと笑った。

ふふふとにこやかに見つめる慧とはしゃいでいる黎貴は、まるで本当の姉弟のようだ。そんな仲の良さそうな二人に、黎貴の神仙で、慧の従兄である脩一は、どちらに嫉妬したかはわからないが、ないがしろにされて少し腹を立てたようだった。

「…そんな事はどうでも良いからさ、二人とも、これからヒマ？」

脩一の言葉に、慧は半眼で手にしたスーパールの袋を掲げてみせる。「ヒマなわけではないですよ。これ見て何とも思わないの？ ジャガイモ持って帰んなきゃ、シチュー食べられないんだから」

シチューは慧の好物だ。しかし、脩一は食い下がった。

「駅前に、すげー大きなツリーが飾られてあるんだよ。見に行かないか？」

「ツリーねえ…。大きなツリーなら、ウチのがあるし」

今のところ、慧は色気より食い気。あまり乗り気ではない。何よりも、日が落ちてきて寒くなってきたのも大きいだろう。

黎貴も、ケーキの話の時ほど乗り気ではない。関係ないと言わんばかりに他人事として聞いている。脩一は、二人を乗り気にさせよ

うと必死になった。

「本当に、すげーキレイなんだよ！ 木だつて本物のモミの木だし、駅前のイルミネーションですげーんだよ。なあ？」

「なあ、つて言われても……」

慧の口振りは、少し迷いが現れたようだ。

「駅までなら、こつから近くだし、ちよつと遠回りすりゃ見れるつて。なあ、慧、黎貴〜。見せたいんだつて！」

「脩……」

必死の説得によつて、黎貴の心がようやく傾いた。本格的なツリ〜というのも見てもたいし。しかし、慧は脩一の口調に目を細めて冷たく言うだけだ。

「見せたいんじゃないくて、タツキーが見たいんじゃないの。私たちをダシに使わずに、一人で寂しく見に行けば？」

「…慧。流石に、それは……」

ひどいだろう。

そう言いかけた黎貴の言葉など聞かずに、慧はくるりと背を向ける。そして、「行きましょ、黎貴」と声をかけた時だ。つん、と慧の袖を引っ張る者がいた。

慧は、黎貴かと思つて仕方なく振り返ると、袖を掴んでいたのは脩一だった。しょんぼりとした目をして、慧を見つめている。

「一人は寂しいんだよ……！ なあ、慧。黎貴〜。見に行こう。見に行こうよ。」

「駄々っ子が」

慧は思わず袖を振り払うのも忘れて突っ込んだ。

「もう、そんな事言つたつて、行かないから」

慧は、ふと言葉をとめた。気付けば、黎貴までもが物言いたげな視線を寄越している。目の前には、目をウルウルさせた子犬のような瞳の脩一が無言で慧を見つめている。

目は口ほどにものを言う。綺麗な顔をしているとは言え、男の子二人に捨てられた子犬のような瞳で迫られる慧は、羨ましいという

か可哀想というか。

「……」

「……」

「……。わ、わかったわよ！ 行きやいいんでしょ、行きや」

とうとう慧が折れた。脩一が、途端に歓声を上げる。

「やったー！ 慧ちゃん優しい？」

「ああもう、そこ！ 女子高生みたいな声上げないの！ 気持ち悪い！」

脩一に半ば憐れみの視線を送って、慧たちは歩き出した。

「うっわー、キレイ！」

行くまでは何だかんだと文句を言っていた慧だったが、いざ来てみると、不満も寒さも忘れてしまうほどに感激したらしい。三人の中で一番はしゃいでいる。

脩一が言っていたクリスマスツリーは大きかった。本物のモミの木に、たくさんのお飾りが付けられて、チカチカと、不規則に赤、緑、そして雪のような白へと変わる。そういえば、学校でもこのツリーの事は評判になっていたのだったと、慧は今更ながら思い出した。

こんなに綺麗なのだと知っていたら、意地を張らずにもっと早くに見に来ればよかったと、慧は思う。

そう、慧は考えながらいたから、前から人が来る事に気付かなかった。

「あ、慧！ 危な……」

気付いた黎貴が咄嗟に慧に声をかけようとするが、今一歩遅かった。慌てて意識を前方に転じた慧は、足元の覚束ない男に気付いて、脇にどこうとした。

一瞬、氷の中を通り抜けた感覚がした。

「え……？」

ぶつかると思っただけで衝撃を覚悟していたのに、男は、慧の『中』を
通り抜けて行った。依然としてフラフラと危なっかしい足取りで。
慧は当然のごとく呆然としていたが、見ていた黎貴と脩一は尚のこ
と啞然とした。

男を慌てて振り返る。良く見れば、背景が透けて見える。

まさか、幽霊!?

蒼ざめる男二人を尻目に、慧は、瞬間は驚いたが、すぐに男を追
いかけた。男の目の前へと回り、腰に手を当てる。

「ちよつとそこのあんた！ 人にぶつかっておいて、一言の謝罪も
ないわけ!？」

ビシリと指を突きつけて、慧は、あるう事が幽霊に説教をし始め
たのだ。

女 いや、怒れる慧は強い。

何だか、脩一はしみじみと思っってしまった。黎貴は、脩一のコー
トの裾を皺がでるほどに握り締めて黙りこくっている。

男は、ぼんやりと慧を見やった。

「……あれは……どこに……？」

いや、慧を見ているようで全く何も見ようとはしていない。

慧は、二度も無視されてカチンとした。相手が、二十歳を超えた
立派な大人だった事もあかもしれない。自分に注意を向けさせよ
うと手を振りかぶった。

脩一は、思わず目を瞑った。

かなり痛そうなお音が響き渡る。脩一がしばらくして恐る恐る目を
開くと、慧は怒りで頬を紅潮させているし、男の方は頬を押さえて
呆然と慧を見つめていた。

「俺が見えるんですか？」

男は、なぜか敬語。恐るべし、慧。

慧は、まともに張り手が効いた事に軽く驚いていた。

「見える……し、何か、触れるみたい……」

最初は通り抜けてしまったのに。

ねえ、と振り返ると、脩一はポカンとしているし、黎貴は蒼白な顔をしていた。

慧を見つめていた男は、不意にガバツと慧に向かって頭を下げる。慧たち三人はぎょつとした。

「どうか、俺を助けてください！」

「はい？」

男は、興奮で瞳を輝かせながら頼み込む。周囲の人々には、この男が見えないのか、たまに通り過ぎる人が慧たちに不審そうな目を向けるだけだ。

「死んでから、俺の姿が見える人は初めてです。俺に力を貸してください。あなたたちの力が必要なんです！」

三人は、ただただ啞然とするばかりだ。初対面の幽霊に声をかけられた上に、『助けてくれ』だなんて。季節外れの幽霊が見えてしまったこちらの方が助けてほしいのに。

「……だって。どうしよう？」

「どうしようだったって……」

同じく、どうしたらいいのか判断がつかない脩一は、ふと、これまで黎貴が何も反応していない事を思い出して、コートにしがみついている黎貴を見下ろした。

「黎貴。お前はどうすれば良いと思う？ ……って、黎貴？」

蒼白な顔をしていた黎貴は、不意にヒクリと喉を鳴らすと、白眼を剥いてひっくり返った。

「黎貴っ!？」

驚愕する慧。間一髪で黎貴を抱きとめた脩一も、一瞬病気かと慌てたが、すぐに半眼で呟いた。

「…気絶してる……」

これには、慧も呆れてしまった。

黎貴が人見知りだというのはわかっていた。しかし、ただか幽霊ごときで、龍の雛 神獣ともあるうものが気絶してしまうとは。情けなくて言葉もない。

もちろん、慧も脩一も幽霊を実際に見るのは初めてだろう。しかし、神仙として、これくらいで揺らぐようなやわな鍛えられ方をしているのではない。

かと言って、起こして騒がれるのも得策ではないので、黎貴はこのまま気絶させておく事にして、脩一が負い、改めて男に向き直る。不本意ながらも関わってしまったし、慧にいたってはビンタまで食らわせてしまったのだ。話くらいは聞いてやらないと祟られそう
だ。

「協力できるかわからないけど、とりあえず話を聞かせて」

「ありがとうございます」

幽霊は、勢い良く頭を下げた。

曰く。

生前の名を家森敏明やもりとしあきというその男は、ちょうどクリスマス前の晩に恋人と会う直前に交通事故で死んでしまったらしい。恋人を残して死んでしまった事はもちろん未練だが、それはそれで死んでしまっているから仕方がない。彼は、自分が死んでしまっているという事をきちんと理解していたし、成仏したいとも思っていた。

問題は、彼に、大きな心残りがあるという事だ。死ぬ直前に持っていた、恋人へのクリスマスプレゼント、それが見つからないのだ。自分が死んだ後も、恋人の手に渡る事もなく、行方が杳としてしれない。今更、見つけ出したところでどうなるものでもないのは家森自身にもわかってはいたが、気になって成仏できないのである。

「本当に、本当に大切なプレゼントだったんです…」

そのプレゼントの行方を探してほしいというのが、家森の願いだった。慧は、ぴんときて家森に確認する。

「…もしかして、そのプレゼントって…指輪？」

こくり、と家森はうなずいた。

聖夜の怪…？

「働いて働いて、ようやくお金を貯めて指輪を買って、『結婚してください』って…言うつもりだったのに…」

婚約指輪になるはずだったものがなくなってしまったのだ。それは、尚更成仏できないだろう。家森は、しょんぼりした。

慧は、慰めるように家森の肩を叩こうとして、体を通り抜けてしまった。驚く。さっき触れたのは、嘘だったのだろうか。

「…ま、まあ、そんな事なら仕方ないわ。わたし達も探してあげる」「え！？ そんな事いうけど、慧」

脩一は止めかけるが、慧にずいっと迫られる。

「困ってる人は助けてあげないと。それに、黎貴だって、幽霊ごときに気絶してもらっちゃ困るの。この際だわ、克服してもらいませよ」

まあ、確かに。脩一はうなずきかけて、最大の問題事項に気付いた。

「でも慧。探すのは良いけど」

「じゃ、決まり！」

「え」

脩一の言葉は、綺麗に無視される。あまりの仕打ちに脩一はこれ以上何も言えなくなり、慧と家森の間でのみ着々と相談が進められていく。

気のせいかな、さっきよりも背中の黎貴が重くなったような気がした。

慧が、何も無い空間を向いて誰かと会話をしている。

駅をブラブラ歩いていた慧の級友・岩井文也クラスメイトは、それを目に留め

て足を止めた。

「ん？ 倉橋さん…？」

小さく名を呼んだ文也は、何かに気付いたかのように眼を細めた。

「ほんとと、情けないわね。幽霊ごときで気絶なんて」

「……」

黎貴に対して慧は、怒っているというよりも呆れている。黎貴は、我ながら情けないと思ったのか、しょんぼりと項垂れた。

「怖いって思うのもわからなくはないけど、あんたは龍で、神なのよ？ 幽霊くらい、まともに対峙できるようにならなきゃ。笑われるわよ」

「……」

黎貴は黙っている。しかし、その沈黙は、さっきとは違う気がする。激しい憤りのような、強い感情が底にある。慧は、挑発した。

「それとも、笑われていいの？ 弱虫、泣き虫って」

「………っ」

一瞬息を呑んだ黎貴は、激しく首を振って声を絞り出した。

「……いやだ……っ！」

常でない強い感情に慧は驚いたが、ありがちな負けず嫌いだとは思わなかった。今なら、黎貴の幽霊に対する恐怖が克服できるかもしれない。神獣なのだ、ただの人よりも不思議には強いはず。そう信じて。

「じゃ、今から家森さんに会いに行きましょっか」

「え！？」

黎貴は、強がったものの、心の準備はしていなかった。サアツと顔を蒼ざめる。慧は、そんな様子にイラツとして、あえて無視する。

「作戦会議よ。行きましょ」

すでに慧に逆らえない黎貴は、頂垂れた。

さあさあと、黎貴は強引にコートを着せ、慧と黎貴は寒い中出ていく。

途中、慧はふと黎貴に尋ねた。

「ねえ、黎貴。どうして幽霊が怖いのか？ 体もないし、害を加えられる事も特に、神獣のあんたなら、ないはずじゃない。それに、天界では見慣れてるんじゃないの？」

なかなか漢らしい発言だ。そう思えるのなら、誰も幽霊など怖がらない。黎貴は、そう思いながらも、その事は口にしなかった。

「私が住んでいた水晶宮には、幽霊はいなかった。そもそも、天界にはあまりいない。だから見慣れて、いるわけではない。幽霊は、わけがわからないから怖い。」

「そんな事言ったら、私にとっては、あんた達神獣もわけがわからない存在よ。」

納得して聞いていた慧は、ズバツと切り返す。「わけがわからない」と言われて落ち込む黎貴に、慧は笑う。

「冗談よ。確かに、暗がりですらめしやあ」って出てこられたらすごく怖いかも知れないけど、今は周りも明るいし。一人じゃないじゃない？ 大丈夫よ。家森さんにとってはもいい幽霊だし。」

自信たっぷりと言う慧を眩しそうに仰ぎ見て、黎貴は小さく呟いた。

「慧がいれば、大丈夫かもしれない。」

祟られそうもない慧を見ると、不思議に怖さが薄れるような気がして、黎貴はうなずいた。

はや三日目。

相変わらず家森のために指輪を探しているが、いつかこうに出て来ない。一日、二日は大した事ないと笑っていた慧だったが、流石に

三日経って手掛かりすらないととなると、疲労の色が隠せない。

「ねーもう！ 何で見つからないかなあ！」

「指輪って小さなモンだし、大体、ないって事は誰かに盗られたって事も…。あ、いや、あくまで最悪その可能性もあるってだけだから！」

思わず弱音を吐いた脩一は、家森のシヨックを受けた顔を見て慌てて言い添えた。

休憩と称して、ベンチに腰掛ける。脩一は、先に一息ついていた慧と黎貴に温かいお茶を差し出した。

「ありがと、と受け取りながら、慧は手を温める。」

「でも、諦めるわけにはいかないでしょ。クリスマス、もう明後日まで迫ってるし。家森さんが今年も成仏できなかつたら、私たちの責任なんだから」

「そうだけどさ…」

これだけ探しても見つからないのだ。このツリーや、近くの事故現場にもないととなると、正直どこを探していいのか見当もつかない。

「ありがとうございます、皆」

家森は、しょんぼりとしながら頭を下げる。黎貴は、初対面の衝撃自体は克服したらしく、一応は何事もなかったかのようにしている。しかし、かなりまだ怖がってはいるが。

「いいのよ。いいの。これは私たちのおせっかいなんだから。それより、家森さん。他に何か思い出せないの？ 最後に持ってたのはどこ、とか」

「…すみません…」

家森の言葉に、慧はハアツと息を吐く。不意に、脩一は「あ」と声を上げた。

「この近く、交番あったよな？ 俺たちで探す所は探したんだし、後はお巡りさんに聞いた方がわかるかも。それに、何年も前のモンだったらあるかわからないけど、落し物で預かってくれてたりしないか？」

「あ、そっか。そうね。どうしてそれを早く言わないの！」

「今気付いたんだって」

脩一は得意げに言う。家森も、言われて初めて気付いたようだった。

そうと決まれば行動あるのみ。四人は、早速交番へと向かった。

文也は、小さなものを握り締めて微笑んでいた。

「流石に、これを見つけて出すのは、ちよつと手間だったかな」

握り締めた右手でパチリと指を鳴らすと、その手にあった指輪は綺麗に消えていた。

この交番に配属されたばかりという若い警官は、家森の事故の事も知らなければ、前任者の事も良く知らなかった。

最後の望みまで絶たれてしまった。四人は、すごすごとツリーの傍に戻る。

手掛かりも何も無い。もう、見つからないのだろうか。

「……はあ……」

大きく溜息を吐いた、その時。

不意に、突風が吹いたかと思うと、慧は、何かが隣を通り抜けていったかのような気がした。

「もう、何なのよ……」

ぶつくさ言いながら、ぼさぼさになった髪の毛を直した慧は、ふつとツリーを見上げた。

「……あ……」

小さく声を上げて、慧は急に立ち上がると、ツリーの枝でたくさん飾りの付けられていた一枝を引っ張った。そして、何かを外す。

脩一は、慌てて傍へ寄った。

「おいおい、勝手に飾り取っちゃ」

「これ。そうなんじゃない？」

突き出したのは、銀の小さな指輪だった。小さなルビーがついたもの。脩一もハツとして、家森を呼ぶ。家森は、見るなり、声を詰まらせた。

「これ…です…」

「何でこんな所に？」

脩一は、呆然と呟く。この木は、生木だから、指輪が去年、一昨年からあったとしても不思議はない。下ばかり見ていたので、上は盲点だったのもあるが、それにしても意外だ。

慧は、あっけなさ過ぎて肩を落とした。気のせいじゃなく、これまでの疲れがどつときた気がした。黎貴も脩一も、疲れた顔をする。

「あー、もう、疲れたあ…。灯台下暗しだったわけ？」

「そんな事ありません」

家森の言葉に、三人はハツと彼の顔を見る。家森は、なぜか持てないはずの指輪を持って、三人に晴れやかな笑顔を見せていた。

「私のために、皆必死に探してくれた事、俺は忘れません。…って、俺、死んでるから、意味ないか…」

「いや…」

不意に、小さな声がきつぱりと否定する。これまで、あまり喋らなかつた黎貴が口を開けた事に、家森はもちろん、慧と脩一も目を見張った。

三人の注目を浴びて、黎貴は急に怯んだ。もごもご口ごもるのを、慧は優しく目で促す。

「…だ、だから…。どんな事にも、意味はある…し、お前の事は…私は忘れない…」

家森は、ゆつくりと、柔らかく微笑んだ。

「ありがとうございます」

その笑顔をまともに見てしまった黎貴は、顔を赤らめてそっぽを

向く。くすり、と慧と脩一は顔を見合わせた。

「どうやら、幽霊は克服したか。」

スウツと、家森の体が透け始める。あ、と声を上げた慧に、黎貴は振り向いて引き止めようとする。

「あ…、駄目だ…っ」

「いいえ。俺、いきます。皆のおかげで、俺はもう未練なくなっちゃったし。…それに、俺の事、忘れないでくれるんでしょう？」

こくり、と黎貴はうなずきだけだった。最初こそ怯えていたものの、一度は心を通い合わせたものには、ありったけの親愛を寄せる。それが黎貴。神獣だ。

もう、今の黎貴は家森を　幽霊を怖がる事はなかった。

家森の体がどんどん透けて、もう、輪郭すらなくなる。

カラン、と指輪が地面に落ちる小さな音とともに、家森は消えた。こうして、クリスマスは無事に始まったのだった。

「何とかなって、良かった、かな？」

可愛らしい声が、風に溶けた。

聖夜の怪…？（後書き）

こうして、これから慧たちは厄介事を次々と呼び寄せていきます）
笑）乞うご期待！

ある告白…？（前書き）

黎貴の重大な告白。そして、文也の意外すぎる正体が明らかになる！？

ある告白…？

『今朝未明、市内のマンションで女性の絞殺遺体が発見されました。亡くなっていたのは鈴木里菜さん二十五歳で』

朝、慧^{けい}が寝惚け眼で食卓に着くと、流れていたニュースが耳に飛び込んできた。

「あら、嫌ねえ」

テレビに眉を顰めながらも、どこか呑気に深陽^{みはの}が言っただけの味噌汁を置いた。

朝に弱い慧は、大きな欠伸をしてから箸を持った。

「おはよ、母さん。黎貴^{れいき}も」

「おはよう、慧…」

黎貴は、すでに食事を終えようとしているところだった。ぼそりとした返事も、眠い慧にはいつもほど癪には障らない。

深陽は、慧にこやかに挨拶を返して台所へと引っ込む。

その間も、ニュースは続いていた。

『警察では、怨恨による殺人事件として捜査を進めています。それでは、次の』

「殺人事件だつて。やあねえ」

慧は、目玉焼きをつつきながらようやくはつきりしてきた頭で感想を述べる。その感想が深陽と全く同じである事には気付いていない。

黎貴は、じいっとテレビ画面を見つめていた。まだまだテレビが珍しいのだろうか。

慧は気にも留めなかった。

「慧。帰り気を付けなさいね」

「はい。分かってる」
そう返事をしてから、時間に気付いた慧は、慌てて朝食をかき込んだ。

いつもよりも少し早く学校に着いた慧は、教室の戸を開けて目を見開いた。

いつもより早いと言ってもそれほど早く来た訳ではない。なのに、教室には一人しかいなかった。

「あ、お早う。倉橋さん」

いたのは、最早すっかりとクラスに溶け込んでしまっている転校生の岩井文也いわいふみやだった。

女の子と見間違っくらいに可愛らしい顔立ちの男の子で、一見すると人畜無害そうに見えるがやはりどこか得体のしれないものがあるのも事実だ。

そう感じているせいか、慧はまだ文也に心を許す気にはなれなかった。

「…おはよ」

短く返し、慧は席に着く。

慧の席は文也の隣だから、色んな意味で運命の悪戯としか言いようがない。

鞆から教科書を出して机の中に仕舞う。

その間、二人とも無言だった。

そう言えば、と不意に文也が口を開けたので、慧は文也の顔を振り返る。

「今日のニュース見た？ 女性が殺されたって事件」

「ああ、あれね。うん。意外に現場が近くてびっくりした」

何を言われるのだろうと思っていた慧は、他愛ない話題に少し拍子抜けしてしまった。

「そうだね。犯人もまだ捕まってないって言うし…。怖いね」

文也は、肩をすくめてみせる。

「でも、怨恨による殺人事件でしょ？ 私たちには関係ないわ」

「そうだね。…そうだと良いんだけど…」

文也は、妙に意味深に呟く。

しかし、慧にはただの心配性にしか聞こえなかった。

「警察が血眼になって犯人捜してるでしょ。もしかしたら、もう捕まえてるかも。心配ないわよ」

「うん。頑張ってるね」

「…はい？」

今の会話、どう考えても成り立っていない。

何を頑張れと言うのだ。

文也は、時たま いや、そう言えば出会った時から不可思議で妙に意味深な事を慧に言っていた。

他の人に聞いてもそんな事はないと言うから、そんな事を言うのは慧だけらしいのだが。

これまで、不思議に思いながらも周りに人がいて訊けなかったが、今なら人はいない。

「あの、岩井くん？」

「なあに？」

文也は、「変な事でも言ったかな」と言わんばかりの可愛い顔で小首を傾げてみせた。

まるで、自分が可愛い事を知っていて、反論を許さないようだ。

しかし、それくらいでやられるほど、慧は乙女ではない。

「ねえ、今の頑張ってる」

「おっはよう！ あれ、慧も文也君も早いねー」

慧が尋ねようとした瞬間、突如として教室の戸が開いたかと思うと、クラスメイトが無駄に明るい声で入ってきた。

慧は、脱力した。

いつもこうなのだ。

慧が文也の言葉の核心を探ろうとする度に、どこからともなくタイミング良く邪魔が入る。

まるで、図られてでもいるかのように。

慧は、今回も追及を諦めたのだった。

お昼休み、慧は、げんなりと弁当をつついていた。

深陽（母）特製の、幼稚園児のようにカラフルな弁当が嫌な訳ではない。

寧ろ、子供っぽいと言われそうだが、大好きだ。

しかも、今日は、好物まで入っているのに。なのに、それにさえ手を付けていないのは、結局の所、外的要因によるものだった。

「岩井君のお弁当って、いつもバランスしっかり考えてあるー、って感じだよねー。自分で作ってるの？」

「独り暮らしってホント？」

「えっ、文也君って、独り暮らしなの！？ すごい」

隣の席から聞こえてくる、華やかな嬌声。

転校してから、もう数週間が経つと言うのに、文也を取り囲む女の子たちの熱は、まだまだ引かない。

「慧？ さつきから箸が進んでないよ」

大丈夫、と訊いてくる友人の松永和世まつながかずよに、慧は、「んー」と唸り返した。

「タコさんウイナー、貰っていい？」

「ダメ」

慧は、今日の弁当の中で一番の好物である、蛸の形をしたウインナーの頭の部分に箸をぶつ刺して、乱暴に口の中に放り込む。

和世は、ちら、と隣の女の子たちを見遣った。

「それにしても、全然収まもないね、コレ」

箸で、隣を指した和世に、慧は、心の底から肯いた。和世は、続ける。

「確かに、岩井クンって、可愛いし、雰囲気もちよっと他の男子と違うしねー。でも、私は、岩井クンよりも」

不意に、和世が言葉を切った。

それと同時に、肩を叩かれる。首だけで振り返れば、ぷすりと、何かが頬に突き刺さった。

人差し指だった。

「やゝい、引つ掛かったゝ！！」

振り返ると、従兄の脩一しゅういちが、やたら勝ち誇った顔で叫んだ。

慧は、固まった。

途端に、すぐ傍で黄色い声が出た。

和世は、実は脩一の熱烈な信奉者なのだ。

「タツキー先輩！ どうしたんですかあ？」

語尾に、怪しげなピンク色の模様をつけてされた問いに、脩一は、フツと髪を払った。

カッコ付け方が一昔以上古いのは気のせいだろうか。

「君たちがあまりに可愛いから、ちよっと話がしたくてね」

再び、きやああと云う嬌声がする。

得意の絶頂にいた脩一は、不意に、ガシツと指を掴まれた。それと同時に、寒気が襲う。

「……………タツキー……。これは一体、何のマネなのかしらー……………？」

「け、慧……！」

脩一は、震え上がった。

いつもだったら、これ位の事では怒ったりしない慧なのに、今日

の機嫌は最高に悪かったようだ。

地雷を踏んでしまった。

「いや、あの、嘘！ 嘘ですっ。ちゃんと話があつて……!!」

「ごめんなさい、悪ふざけし過ぎました、と土下座する勢いで謝る
脩一。」

先輩としても、男としても、かなり情けない姿だ。

しかし、脩一は、幼馴染のこの慧には、どうしても頭が上がりな
かった。

これが日常風景なので、和世は腐りながらも微笑ましく二人の遣
り取りを見つめている。

「ふうん？」

慧は、指に力を込める。

「イタ…、痛い、慧！ ちょっと…離して下さい、慧ちゃん!!」

折れる、と連呼する脩一の目が潤んでいる。少しやり過ぎたかと
思つて、慧は、指を離してやった。

脩一は、涙目で握られた指をさすり、慧をキッと睨みつけた。

「ホントに折れたらどうしてくれんだよ!？」

「で？ 用件は？」

慧は、脩一の文句など、聞いてやらない。脩一は、無視されてへ
こんだが、すぐに真剣な眼差しをする。

「慧。今日、一緒に帰ろう!」

「ハア？」

真剣な顔をして何を言うのかと思つたら、そんな事か。

慧は、拍子抜けした。いつも一緒に帰っているのに、今更、改め
て言わなくても、脩一を置いて帰ったりはしない。

しかし、脩一は、いつになく真面目だった。

「絶対だからな!？ 絶対一緒に帰るんだからな！ 迎えに来るか
ら、先に帰るなよ!!」

「あー、はいはい。分かつたわよ。待つてれば良いんでしょ」

慧は、面倒臭そうに、頷く。

脩一は、最後に絶対だからな、としつこいくらいに叫んで教室から消えて行った。

ふう、と大きく溜息を吐いた。

「相変わらず、仲良いよねー。慧とタツキー先輩」

その言葉に、慧はゲツとあからさまに嫌そうな顔をしてみせる。

「冗談でしょ？ 仲良いって言うか、アレは腐れ縁なの。イトコに生まれた運のツキ」

「慧って結構意地っ張りだよな……」

呆れたように和世が言う。

凶星を指された自覚がある慧は、ギロリと和世を睨み付けた。

生まれる前からの付き合いなのだ。脩一と仲が良い云々の話は、次元を超えていると言う事だけは確かだろう。

しかし、と慧は脩一の事を思い出すと、何故だか疲労に襲われる気がする。

本当に、嫌なヤツじゃないのに。

「ただいまー。黎貴、いるー？」

約束通り脩一と一緒に帰った慧は、そのまま家に帰った。玄関で脩一を待たせて、靴を脱ぎながら奥へと呼びかける。

黎貴は、台所から、ひよっこりと顔を出した。

「……お帰り、慧。…脩一も」

黎貴は、もうかなり脩一に徐々に懐いていた。

脩一が、面倒な性格ながら慧よりも人が好く、とっつき易いと分かっていたからかも知れない。

ある告白……？

「コート持ってきなさい。すぐに出かけるわよ」

慧は、鞆を下ろして中から財布と携帯電話を取り出してコートのポケットにしまいながら、言った。

黎貴は、何故かエプロンに三角巾の格好で近寄ってきた。淡いピンクのフリフリエプロンが、妙に似合って気持ち悪い。

「今すぐは……。ハルちゃんが、ケーキを焼いてくれるって……」

渋る黎貴に、慧は、ぴしゃりと言いつ放った。

「ケーキなんて、後からでも食べられるでしょ。急いでるんだから。ホラ、行くわよ」

慧は、黎貴のコートを持ってくると強引に着せ、台所でケーキ作りに勤しんでいるハルちゃん　こと、深陽に声をかける。

「母さん！　黎貴連れてタッキーん家行って来るー」

「あ、ちよつと待って。クッキー、もう少しで焼き上がるから、それだけでも持っていって」

「急いであるから、また今度！　行ってきまーす」

ズルズルと慧は、問答無用で黎貴を引っ張っていく。

「……一体……何なのだ……」

すっかり虜になってしまっているケーキを食べそこねてよっぽど腹に据えかねたのだろう。

黎貴は不満そうに呟く。

「さあ、私も聞いてないからなあ。一体何なんだろ？　知ってる？」

一緒に慧も首を傾げる。それに、脩一も同様の仕草をする。

「父さんが『今日は慧ちゃんと黎貴君にウチに寄って貰いなさい』
としか言わなかったからなあ。俺も知らないよ」

「伯父さんがねえ……」

思い当たる事がない三人は、ただただ首を傾げるだけだった。

慧と黎貴のご指名という事は、何か黎貴や神仙に関わる事である

うというのは想像がつくのだが、内容まではまったく見当がつかない。

「こんにちはー」

お邪魔します、と言いながら、慧は灌沢家へと入った。

脩一が先頭に立ち居間に入ると、炬燵では灌沢家当主で脩一の父である総一そついちと龍族の頭である老婆の龍嫗りゅうおんがぬくぬくとくつろいでいた。

「三人とも、寒いだろう。早く入りなさい」

遠慮なく慧たちは炬燵に入る。

小さい炬燵ではないので、五人程度ならば余裕を持って入れる事が出来るはずだったのだが。

慧は、ムツと脩一を睨み付けた。

「ちよつと、タツキー。あんた、私と黎貴んトコに入らないですよ。

狭いでしょ」

「俺だって、そっちに入りたんだよ」

ぎゅうぎゅうと押し入ってくる脩一と慧の身体に挟まれて、黎貴は、苦しそうに呟いた。

「……狭い……」

それを確かに耳に収めて、慧は勝ち誇ったように言う。

「ホラ！ 黎貴もそう言ってるじゃない。あんた、図体でかいんだから、一人でそっち入ってなさいよね！」

「え」

「『え』じゃない！」

脩一は、渋々慧や黎貴と並んで炬燵に入るのを諦め、一人で寂しく別の所に入る。

落ち着いた所で、総一は、おもむろに一枚の紙を取り出した。三人の前に広げる。

「これを見て」

『今朝未明、×駅付近のマンション、ハイツ・ねばあらんどで女性の遺体が発見された。亡くなっていたのは、このマンションに住む会社員、鈴木里菜さん（25）で、悲鳴を聞いて不審に思った近隣住人が警察に連絡し、里菜さんが死亡しているのを発見した。里菜さんは、首を絞められた痕があり、それが直接の死因のようである。なお、全身を紐のようなもので縛られた痕がある事から、警察は、怨恨による殺人事件とみて、捜査を行っている』

事件の概要は、大まかに言えばこのようなものだ。

「この事件のことは知っているよね？」

「はい。朝、テレビで見ましたけど…」

総一の言葉に要領を得ないなりに、慧は肯いて新聞記事を手にした。それで、気付いた。紙は、一枚だけではなかった。合わせて四、五枚程の紙がホツチキスで止められている。バラリと捲くと、載っていたのは、被害者のプロフィール。マンションの見取り図、司法解剖の結果など。

慧は、ガバツと総一を見つめた。

「これ、警察の捜査資料じゃないんですか!？」

総一は、平然としたものだった。

「おや、良く分かったね。これが警察の資料だって。前にも見た事があるのかい？」

「ありませんよ! でも、見れば分かります。ドラマで見た事あるし。…そんな事よりも、どうして警察の捜査資料が手に入ったんですか!？ これを私たちにやって、何をさせたいんですか!？」

総一に代わって、龍嬸がさて、と口を開けるとキツパリと、しかし、衝撃の一言を言い放った。

「この事件、そちらに解決して欲しいのじゃ」

「は？」

「え？」

「！？」

三者三様の反応。しかし、その思う所は一つだった。

「警察の捜査も難航しているような殺人事件を、私たちみたいな素人が解決出来る訳がないじゃないですか！！」

龍姫は、冷静だった。

「いや、言葉が間違っておった。犯人を捕まえるのは、そちらでなければならぬ」

その龍姫の意味深な口ぶりに、慧は、ピンとした。スツと、目を細める。

「それって、どう言う…？ まさか…。もしかして、龍姫、この事件の犯人、分かっているんですか！？」

その言葉に、黎貴も脩一も驚いた。総一だけが、全てを知っているらしく、ただ黙って龍姫と三人を見守っている。

「天界において遊ぶす太白神たいはくしんより、御使者がいらせらての。使いの大蛇おろちが、誤って地上へ墮おちてしまったそうなのじゃ。元々、大蛇は気性が荒くて太白神ですら手を焼くほど。それが下界へ墮ちてしまいい、何か災いが起きねば良いかと苦慮しておったのじゃ。そこに、この事件。恐れていた事が起きてしまった」

慧は、ようやく納得した。被害者の息を止めた紐も、体の自由を奪っていた縄も、見つからなかったと言う。それが、大蛇の仕業だったと言っのなら、事件は驚くほど簡単になる。

総一が、実はね、とようやく内部事情を明かしてくれた。それは、驚くべき事だった。

「天界の者が起こした事件は天界の者が始末をつけるのが掟なんだ。でも、成獣は『力』を揮う事はご法度。今、天界の者として地上で『力』を揮う事の出来るのは、この辺りでは黎貴君しかいない。だから、長官には無理を言っつて捜査資料をコピーさせてもらったんだ。…実際、この事件は警察じゃ解決出来ないしね」

総一は、総務省の官僚だ。表向きは大きな役職にもついてはいないのだが、神仙を束ねる家の一つである瀧沢家の当主であるから、ともすれば大臣にまでも直接物を申せる立場にあるのである。

今更ながらに瀧沢家の偉大さに気付く慧である。

コホン、と龍嬸が咳払いして注意を呼び戻す。

「兎も角、天に住まうものが地上へ故なく墮ちるも、人を殺めるも、罪。黎貴、慧、脩一。彼の大蛇を急ぎ捕らえ、天界へと送るのじゃ」

龍嬸は、きつぱりと言う。慧と脩一は、慌てた。

「そんな、あつさりと言わないで下さい！」

「そうですね！ どうやって大蛇を、しかも、こんな広い町の中で探せつて言っんですか!？」

二人の言葉に、龍嬸は、やけに落ち着いた様で答えた。

「大蛇は、まだ死者の部屋におる。そこに行けばよいのじゃ」

「でも、天界に送るつて、どうやって」

神仙と言つても、不思議な力も持つていない。そもそもが仙人となる資格を持った普通の人でしかないのだ。本当の仙人のような仙術も会得していなければ、そもそも天界にも行った事がない。

それが分かっているであろう龍嬸は、事もなげに言った。

「その為に黎貴がおるのであるうが」

「はい？」

二人は、ポカンと顔を見合わせ、そして、黎貴を見つめた。いきなり注目を浴びて、黎貴は、身体を強張らせる。ダラダラと冷や汗を流す黎貴を見て、龍嬸は、溜息を吐いた。

「黎貴……。我ら龍も、確かに神じゃ。それも、天界の、な。神ならば、左様な事、朝飯前であろうが。通力の使い方も、我はしかと教えた筈じゃ。よもや、忘れたとは言わせぬぞえ」

「…それは……覚えてるが……しかし……」

小さな言葉で、黎貴は呟く。龍嬸は、黎貴を励ましはしても甘やかしはしなかった。

「これが良い機会じゃ。黎貴、努力しや」

「でも、龍姫」

どこか切羽詰ったように、黎貴は、龍姫を呼ぶ。その心を察したの
だろうか。ふと、龍姫は、表情を柔らかくさせた。

「大丈夫。そちらなら出来る筈じゃ。畏れるでない。何しろ、そち
は、この婆ははが見込んだ子じやからのう」

くしゃり、と皺だらけの手を伸ばし、黎貴の髪を撫でる。しかし、
黎貴は、泣きそうな顔で俯くだけだった。その肩は、何かを恐れて
いるように小さく震えていた。

太白とは、金星の古名である。その金星を神格化したものが、太
白神だ。古来より、金星は、厄災を呼ぶものとして忌まれてきた。

つまり、太白神は、禍まがつ神。その使いとなれば、おのずとその性格
も善よくはなかるう。凶暴さにも納得が行くと言つものだ。

「黎貴？ 黎貴ってば。何か分かんないの？」

「……」

先刻から、黎貴は、沈黙を貫いている。脩一は、ふう、と息を吐
いた後、二人に言った。

「とりあえず、事件の現場に行ってみよう。捜査の基本だしな」

じつとしていても仕方がない。行動あるのみだ。慧も、黎貴も、
異論は無かった。足を、駅付近のマンションに向ける。

この市内で起きた事件だ、事件の起きたマンションは、行った事
がないなりに場所はよく知っていた。

「あ」

マンションの周辺には、まだ黄色いテープが張ってある。そして、
慧が小さく声を上げたのは、そこに見知った顔を見たからだった。

ある告白……？

「岩井……」

慧が、ポツリと呟く。じつとマンションを見上げて佇んでいた少年 文也は、振り返って顔を綻ばせた。

「あれ、倉橋さん。どうしたの？ こんな所で」

「君こそ」

そう返した所で、くいつとコートの袖を引っ張られた。見れば、もの言いたげに黎貴が見上げていた。慧は、思い出した。双方の事を知っているのは、自分だけなのだ。ここは、紹介してやらなくてはならないだろう。

それにしても、人見知りのひどい黎貴が、文也に対してはそれ程ひどくないのは、無駄に可愛らしくて爽やかな文也の顔のおかげだろうか。

つくづく最強な、文也スマイル。

「……こっちは、クラスメイトの岩井文也君」

文也は、脩一にっこりと花のような笑みを見せた。

「よろしく願います。あなたは、倉橋さんの従兄の瀧沢先輩ですよね。噂は色々伺ってます」

ペコリ、と文也は、脩一に頭を下げる。色々な噂、と聞いて、脩一は気になったが、自分に好意を持って知っていてくれるのなら、それに越した事はない。寧ろ、誰かの噂になる事など滅多にあるものではないから、ご満悦だ。

「……で、こっちは子は……？」

「フイ、と視線が黎貴へと向かう。慧は、些か慌てた。

「あ、あの、えっと……。この子は、黎貴って言って……。何て言うか……。あ！ そう、遠い親戚なの。事情があって、ウチで引き取ってるのよ」

「……よ、よろしく……」

少しどもりながら、黎貴はペコリと頭を下げる。文也は、納得していないような顔で、「遠い親戚ねえ」と呟いた後、クスリと笑った。

「…そう言う事にしといてあげるよ」

相も変わらず摩訶不思議な発言をして、改めて、どうしてこんな所にいるの、と尋ねた。脩一は、曖昧に笑う。

「ちよつとな。殺人事件の現場に興味があつて…」

「ふうん、そうなんだ。でも、三人ともそんな人には見えないんだけどな」

鋭い。童顔のくせして。

しかし、文也は三人にとっては幸いな事にそれ以上は深く追及しなかった。もう興味を失ってしまったかのようにも見えた。

「じゃ、僕はもう行くよ。…気をつけてね」

最後に、また意味深な言葉を残して、文也は、飄々と去って行った。文也が見えなくなつてから、慧は、黎貴に向き直る。

「さてと。取り敢えず現場には来たわね。で、黎貴。これから私たちはどうすれば良いの？」

いきなり振られて、黎貴は狼狽する。

「どうつて……」

「だって、あんただけが頼りなのよ。私、よく分かんないし。その通力つて言うのを使えば、簡単なんですよ？」

「……………」

慧は、あつけらかんと言う。しかし、その言葉を聞いて、黎貴は、唇を噛み締めて俯いた。

「どうしたのよ？」

「……出来ぬのだった……」

しつかり引き結ばれた唇の間から、搾り出すようにして、黎貴は言った。慧も、脩一も、その言葉の響きにハッと胸を突かれて黎貴をじっと見つめる。

「……私は…通力を使う事が出来ぬのだ……!!」

彼にとって、この告白は、多大なる勇気が必要としたのだろう。
細い肩は、震えていた。

脩一は、恐る恐る訊く。

「…通力が無い訳じゃないんだな？」

「……………」

黎貴は、泣きそうな顔をした。ただの沈黙を、慧は肯定と取った。
「龍姫からは、一通り使い方は学んだ。…しかし、一度も使う事が出来なかった……………」

慧は、黎貴が人を恐れ、卑屈になる理由が、ようやく分かった気がした。

神なのに、神らしく力を揮う事が出来ない。それは、神獣としては致命的な事なのだ。

「そんな大事な事、どうして今まで黙ってたんだ。真っ先に言わなきゃならない事な筈だろ？」

脩一は、詰問しているつもりはなかった。しかし、黎貴にはそう聞こえたのだろう。小さな体を更に小さくさせて俯く。

「ねえ、黎貴。話して。黙ってちゃ分からない」

優しい慧の言葉に、黎貴はビクリと体を震わせて小さく言った。

「……………また…馬鹿にされると思ったのだ…。嫌われたくなかった…

……………」

そうか、と脩一は呟く。無言だった慧は、不意に、手を伸ばして黎貴の髪をぐしゃぐしゃと力一杯掻き回した。黎貴が顔を上げる。

「バカ」

その言葉に、黎貴は頂垂れた。しかし、慧は、真っ直ぐな瞳で黎貴を見つめていた。

「ホント、バカね。そんな事くらいで、私たちがあんたの事嫌いになるとでも思ってたの？ 私たちは、そんなに心が狭くないわよ。

確かに大事な事だから、もっと早く話してくれてれば嬉しかったけど…。もう！ めそめそしないの。解決する訳じゃないでしょ。違

うっ？」

黎貴は、小さく首を振った。慧は、好しと頷く。

「ま、何にせよ、取り敢えずさつさと大蛇をふんじばっちゃいませよ。天界に送り帰す方法は後から考えたら良いわ」

そう言つて、目の前に張られたテープを素早く潜り抜ける。警官の姿はない。入り込むなら今だ。狼狽する男共に、慧は、凜と言いつつ放った。

「手掛りは必ず現場にあるわ！ 行くわよ！」

刑事ドラマのようなノリで突き進んでいく慧の後を、黎貴と脩一は、慌ててついて行く。

マンションには、警告テープこそ張つてあるものの、今も住んでいる人がいる。堂々としている限り、子供を疑う者はいないだろう。そう考えている慧は、胸を張つてマンションへ入つて行く。案の定、すぐに警官が来たが一瞥されただけで何も無かった。

すんなりとマンションに入り、エレベータで四階へと向かう。

「良いとこ住んでるわよねえ」

慧が、緊張感のない感想を洩らしながらエレベータの中を見回している。

軽い浮遊感と共に、チーンと音がして、目の前の扉が開く。途端、空気が重く、淀んでいるような気がした。殺人が行われ、神の使いがいる場所と言つのは、こんなものなのか。それとも。慧は、そろり、と周囲を見回す。誰もいない。

今しかない。

「四六二、四六二号室つと」

部屋のプレートを見ながら、問題の部屋を探す。

「慧。あった……」

先頭を歩いていた黎貴が、小さく声を上げて立ち止まった。そう、何の変哲も無いマンションの一室。脩一が、ふと思ひ出したように慧の方を向いた。

「そつ言や、この部屋の鍵は？」

何も考えずにここまで来てしまったが、鍵が無いと言つ事は、相

当にマズイ状況ではないだろうか。部屋に入れなければ大蛇を捕まえる事は出来ない。

黎貴も脩一も、気付いて顔を蒼ざめさせた。しかし、慧だけはうるたえなかつた。おもむろにコートポケットに手を突っ込むと、銀色に光る歪な金属を掲げて見せたのだ。

「これ、何でしょう？」

にんまりと微笑む慧。彼女の手を持つ物を見た瞬間、二人の顔に驚愕が走った。

「それは　！！」

「部屋の鍵……！？」

「ピンポーン」

大正解くと、慧は、笑う。黎貴と脩一は知らなかつたのだが、伯父の家から出る時、総一に渡されたのだ。

慧は、歓喜のあまり縋りついてくる脩一を引っぺがして、部屋のドアに向かつた。鍵穴に差し込もうと、近づけた、その時。

「　　った！」

バチツと言う激しい静電気が流れた時のような音と共に、鍵は慧の手から弾かれて地面に落ちた。

「なに……？」

もう一度、鍵を鍵穴に差し込もうとするが、結果は同じだった。

試しに、ノブに手をやったが、それも弾かれる。

何が起こつたのだろう。訳が分からず、慧と脩一は、首を傾げるばかりだ。ふと、黎貴が、ポツリと呟いた。

「……結果………？」

「結果？」

何でそんなものが、と言った所で、何にもなりはしない。しかし、結果が張つてあると言う事ではつきりした。

この部屋には、確かに大蛇がいる。

結果が張つてあつたために大蛇は部屋の外には出られなかつたのだ。その事は三人には好都合だったが、一体誰がこの部屋に太白を

封じたのだらう。

不意に、静寂を破るようにチーンと音がして、エレベータが開く気配がした。慧たちは我に返った。そして、慌てる。

足音が近づいてくる。誰かが、来る。

三人は、恐慌状態に陥った。今、誰かが来て咎められれば、全てが終わる。もう、このマンションに出入りする事も、叶わなくなるだらう。チャンスは、今しかないのに。

しかし、考えれば考える程、身動きが取れなくなる。

足音が、止まった。

終わった、と思った三人にかけられたのは、妙に呑気な声だった。

「やっぱり、ここにいた」

目の前に立っていたのは、先程別れたばかりの奇妙な慧のクラスメイトだった。文也はつかつかと歩み寄って来ると、にっこりと笑った。

「そろそろ困ってる頃じゃないかと思ってね。初仕事だし、戸惑う事もあるかと来たんだけど、正解だったね」

現状を理解出来ない慧たちをよそに、文也は、どんどん言い進んでいく。

「ちよつ…、岩井!？」

慧に代わってドアの前に立った文也は「ん？」と振り返った。

「なあに？」

無邪気に、文也は微笑む。しかし、そんな笑顔で慧が騙される筈もなかった。にっこり笑ったって、邪魔するものはいない。

これまでの不審な言動、まとめてキリキリ吐いてもらおうじゃないの!

「あんだ、何者!？ 私たちのナニを知ってるってのよ!？」

慧は、詰問する。文也は、ここまで来たと言う事は、全てを明かすつもりだったのだらう。ケロッと答えた。

「…僕はね、実は全部知ってるんだ。黎貴君が黒龍だって事も、瀧沢先輩と倉橋さんが神仙だって事もね。僕も、君たちと似たような

ものだもの
「

ある告白…？

似たようなもの、と訊いて、慧は、ハツとした。

「じゃ、あんたも神仙だつて言うの！？」

ふるふると首を振り、文也は、空気を吐くように答えを口にした。

「僕？ 僕は、ただの陰陽師だよ」

「おんみよーじ？」

それって、お札もつて悪霊退散〜ってやる、アレ？

「…何か、間違つてるとも言えないけど…」

「何よ、文句でもあるの！？」

驚くような話だったが、慧は、それ程驚かなかった。陰陽師は、慧の考えていた退魔も仕事の内だが、他にも、占いや呪い等もそうなのだ。文也の言動も、彼が陰陽師なら、納得がいったからだ。

「まあ、僕の事は、分かつてくれたかな？」

「そんなの、訳わかんない」

混乱している脩一に、文也は、にこりと笑った。

「とにかく、助っ人つて事だよ。太白が逃げられないように結界を張ったのも僕だし」

「は…！？ じゃ、お前がこの結界を…！？」

文也は、にっこりと背後に花を飛ばした。

「そう。黎貴君がいれば、大丈夫かと思っただけど、やっぱり僕が解いた方が良く思ってたね」

ポカンとする面々の中で、文也は、今までで一番真面目な顔をした。人差し指と中指をピンと立てて揃え、それを口の前に持つてきて、小さく何か呟く。目の前のドアを見据える。

「開！」

文也は、躊躇いなくドアノブを掴んだ。ドアは、あっけなく開いた。少しだけ開いたドアの向こうから、もわっと重たく淀んだ空気が溢れ出てくる。

自称陰陽師の少年は、くるりと三人の方を振り返った。その顔には、先程までのあの可愛らしい笑みは微塵も無かった。三人は、ハツと我に返って緊張を取り戻す。

「下界に降りて、おまけに罪を犯している。凶暴だろうから、気をつけてね」

「分かつてる」

三人が頷くと、文也は、ようやく微かな笑みを頬に刻んだ。そして、四六二号室へと入った。

先頭が文也。慧、黎貴、脩一と続いて居間に入って、息を呑んだ。そこには、とぐるを巻いた大蛇がいた。慧の腕程も太さがある。こんなのに絞められたら、一貫の終わりだろう。大蛇は、慧たちに気付くと、金の眼まなこを向けて赤い舌を出した。

「誰だ……」

低い、シューと言う息を出す音と共に大蛇は言った。

文也は、恭しく一礼して、言葉遣いを一変させた。

「この部屋の主を、何故殺めました？」

大蛇は、閉じ込められて不機嫌だった。フンと傲慢に鼻を鳴らす。「…この部屋の者は、吾われがおるにも関わらず、吾に気付かぬふりをした…。愚弄されて黙っておるほど、吾は寛容ではない…！」

鈴木里菜は、ただの人。天界のものを見る事も、感じる事も出来ない。気付かないふりをしたのではなく、本当に分からなかったのだ。

「それは、あなたの事が、見えなかったからよ！」

慧がはつきり言うと、大蛇は、怒ったようだった。

「…見えぬ筈がなかるう！ 現に、その方らには、吾が見えておるではないか…！！」

文也が、穏やかだが凜と大蛇を見据えた。

「この世界には、貴方あなたが見える者の方が少ない事を、ご存知ではないのですね。…しかし、何にせよ、天界に住まうものが故なく下界へ降下するも、人を殺めるも、罪だのご承知の筈。如何いかなされます」

「…む…吾が罪だと、申すか…」

大蛇は、唸る。文也は、スツと黎貴を指す。黎貴は、この後の展開が分かり、ビクリと身をすくませた。

「ここに、龍がおわします。この場に現れたと言う事が、どういう事か、知らない訳でもありませんまい」

「…そこな童が…」

神なる獣には見えぬが、と大蛇は、言う。文也は、黎貴を促した。

「さ、黎貴君」

黎貴は、何も言わず、ただ震えるだけ。文也は、初めて戸惑ったようだった。

「黎貴君…？」

慧が、文也の腕を掴んだ。少し慌てたように言う。

「駄目なの。黎貴は、通力が使えないの。何にも出来ないのよ！」

「…何だつて…！？ だつて」

文也は、顔色を変える。大蛇が、侮蔑の色も露わに嗤った。

「…通力が使えぬ、神獣だと…！？ 何の冗談だ…！？」

シュー、と大蛇が吐く息が、黒くなる。黎貴が、小さくなった。

「…そこな童を神獣とたばかり、吾をまた愚弄するか…！！ …許

さぬ…！！」

鎌首かまくびをもたげ、襲いかかろうと黎貴に向かう。体が大きい割に、動きは、驚く程早い。

黎貴は、咄嗟に腕で顔を覆った。

「危ない…ッ！」

その瞬間、慧が動いた。あろう事か、大蛇に回し蹴りをかましたのだ。太白は、慧の前にあっけなく倒れた。

周りのものが一緒に倒れて散乱し、部屋はもう、片付けられる状態ではない。

「ハアアア…」

慧は、拳を握って息を吐いた。何故か、一仕事終えたと満足げな

様子だ。後ろにいた脩一が、蒼白になっている。しかし、慧は、あつげらんとしたものだった。

「神獣である黎貴を襲おうとするなんて、言語道断！ 裁きが下るわよ！」

「…小娘が…!!」

大蛇は、シューと慧を威嚇する。慧も負けずに睨み返している。大蛇が慧に襲いかからないのは、慧が強敵だと感じているからか。

一人と一匹の作る緊張状態の均衡は、崩れない。

それが分かったからか、さっきまで主導権を握っていた陰陽師が、動いた。すたすたと慧の横をすり抜け、ベランダへと向かう。

「何をやる気だ？」

脩一の言葉に、文也は、ベランダの窓を開け、振り返ると、パチリと星が出るようなウイंकをした。

「今回は、黎貴君の代理って事で、この場合は、僕が治めさせてもらおうと思って」

何たって、僕は、陰陽師なんだしね。

文也は、可愛らしく言っつて、大蛇を見据えた。大蛇が、文也の様子に気付き、阻止しようと動いたが、慧が、素早く前に立ちはだかると、臨戦態勢でクスリと挑発した。

「私から目を逸らしてどうすんの？」

「……ッ……!!」

太白は、激昂する。しかし、依然としてその危うい均衡状態は崩れない。

いや、二人とも動けないでいるのだ。互いに、出方を探り、仕掛けるタイミングを計っている。

一方、文也は、パン、と一度拍手を打つと、目を閉じた。手では、複雑な印を結んでいる。

場の雰囲気、変わる。

「オン・キリキリ・バザラ・ウン・ハッタ……」
スツと目を開けて半眼になって、合掌する。

「謹請し奉る。南方にまします軍荼利明王よ、いざ速やかに光臨し給え。急急如律令！」

唱えるのと同時に、ベランダに何か明るいものが落ちたように、カツと光った。ザアツと、開いたベランダから、風が吹き込む。浮かび上がるシルエットがある。

それは、全身を髑髏びくろで飾り立てた恐ろしい姿の明王だった。召喚した筈の文也には目もくれず、大蛇に近付いていく。大蛇は、畏に打たれたように動けなかった。

「故なく下界へ降下し、人間を殺めし事、天界に於いては重罪だと存じおるか。汝を冥界めいかいへと連れて行く。裁きを受けよ」

四人に一瞥をくると、大蛇をむんずと掴み、首に巻きつけ、来た時と同じようにベランダから出て行った。再び青い強烈な光が閃く。開いた窓から風が流れ込み、カーテンがヒラヒラとはためくのがおさまってから、文也は、クルリと振り返った。

「これで、めでたしめでたし。一件落着だね。…どうしたの？」
「すげえ…」

脩一の言葉は、全員の心の声だった。正直、陰陽師など、見た事も無かったし、過去の遺物だ。文也の言った事など、八割も信じていなかったのだ。しかし、認識は改めねばならないだろう。

「これは、本当は黎貴君がしなくちゃいけない事なだけだね。今回は代理って事で」

文也は、黎貴は気にしないように、何気なく言う。

「…でも、これ、龍姫に何て報告しよう？」

慧は、ポツリと訊く。脩一は、そう言われてみて、結局何も出来なかった自分たちを省みた。少しどころか、かなり情けない。

「…ありのままを言うしかないんじゃないかね？」

「そっだよー」

慧は、溜息を吐く。

「……あの……すまぬ……」

黎貴が、小さく謝った。二人は、目を見開いたが、すぐに顔を見

合わせてふわりと笑った。

「良いんだよ。今日は無理だったけど、いつかは、な。こっちも長い目で見守ってるから、気にすんな」

コクリ、と黎貴は、くすぐったそうに、泣きそうな笑顔を見せた。慧は、にこりと笑っていたが、ふと、我に返った。

「でもさ。この先、また、今回みたいな依頼が龍姫からあつたらどうしよう?」

慧の言葉に、他の二人は考え込んだ。ありえる。あの龍姫なら、絶対にまたあるだろう。

「その事なだけどさ」

文也が、会話に割り込んできた。三人の注目を一気に浴びて、文也は、にこりと笑って言った。

「僕を君たちのパーティに入れてくれない?」

って、ゲームかよ!

と言う突っ込みはさて置き、文也は、ニコニコと続ける。

「今回みたいな事があれば、力になれるし、それに、面白そうだから」

おそらく、最後の言葉が本音なのだろう。しかし、慧たちにとっては、この言葉は、正直ありがたい。

三人は、顔を見合わせる。それぞれの表情に拒否はない、と見て取って、慧は、肯いた。

「良いわよ。…じゃ、文也」

「違う」

文也は、首を振った。え、と訊き返す慧に、文也は、告げた。

「アヤって呼んで。文って書いて、アヤ。岩井文也って名前も間違っちゃいないけど、僕の本当の名前はね、加茂文晴かものあやはるって言うんだ」

文也は、そう言うのにこりと笑った。

「アヤハルねえ…」

口の中で呟いていた慧は、不意に、良い事を思いついたかのように、にんまりと笑んだ。脩一は、全身に鳥肌が立った。こんな笑み

を浮かべている慧の考えている事は、大抵ろくな事ではない。

「分かった。だったら、あんたの事は、今、この瞬間から、アヤヤって呼ぶ事にする！ 良いわよねえ？」

文也アヤヤだから良いだろう、と主張する慧。勿論、反論など聞く気もない。文也は、それ程嫌そうでもなく、文句を言った。

「それ、女の子の渾名あだなみたいだよ……」

「良いじゃない、良いじゃない。一文字増えただけなんだし？」

慧は、あはは、と豪快に笑う。

今は、散らかった部屋の事も、憂鬱になる龍嫗への報告も、忘れていたい。なんとたつて、ようやく一仕事終えたのだから。

それにしても、と慧はチラと黎貴を窺った。黎貴は、笑っていないが、少しだけ暗い顔をしていた。やはり、自分の役割を果たせなかった事が素直に喜べていない原因だろう。

それにしても。

通力がない神獣の雛、とは。

これから大変になりそうだと慧は予感ではなく確信としてそう思った。

ある告白…？（後書き）

呪言とか、陰陽道的なアレは、あくまで私個人のアレンジによるものですので、悪しからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0286x/>

龍は微睡む～蓬莱戯談(ホウライギダン)

2011年10月9日03時15分発行